
北天女神譚異聞～花木蘭とベルダンディー～

羽衣石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北天女神譚異聞〜花木蘭とベルダンディー〜

【Nコード】

N1655Q

【作者名】

羽 衣石

【あらすじ】

煬帝の御世、百万の隋軍は万里の長城を越え高句麗に侵攻した。女性の身でありながら老病の父に代わって従軍し、動乱の隋代末期を花木蘭は戦い続ける。そして彼女と契約したベルダンディーは、中原の興亡をその瞳で見守るのであった。本作は藤島康介著「あつ女神さまっ」の二次創作であり、同時に田中芳樹著「風よ、万里を翔けよ」の二次創作でもあります。中国の京劇や古典文芸に登場する花木蘭の物語に女神を登場させてみようという、大変身の程知らずの作品であります。歴史小説風の描写がありますが、史実と

異なる部分を多く含みますのでご了承ください。

アスガルド 天上界と呼ぶ者もいる、神々の住まう所である。三層九界に分かれる宇宙の上層に位置し、強い光りに溢れる世界であるとされている。中央に最も巨大な世界樹であるユグドラシルがそびえ立ち、大地から吸い上げ葉に集めた力を、世界に住む者たちに余すところ無く注いでいた。

ある日、アスガルドの美しい女神のひとりが人間の世界へ降臨する。そして人間の男と恋をして幸せに暮らすようになるのだが……この物語はそれよりも少し前の出来事である。

広大な大陸で国は興りては亡び、人は骨肉の争いを繰り返す。やがて英邁なる王が現れ、居並ぶ群雄を倒し大河の畔に都を立て再び国を纏める。玉座の主となって後は律令を定め臣民を愛しむも、やがて皇帝の座は子から孫へと譲られる。廷臣の綱紀は緩み、将帥は兵を弄び、国は民を害するに至る。再び国乱れば群雄割拠して、中原にて戦が繰り返されるのであった。

そうして三百年以上の長きに渡り分裂していた中国を再び統一した隋国公楊堅ようけんが、西魏の静帝より禅譲を受けて大隋帝国を建国する。楊堅は中央集権の官僚制度を整え科挙により人材を発掘し、貨幣の統一や仏教の保護により国内を安定させた。天下統一を果たして死後、文帝の諡号おくりなで呼ばれる彼の後継者がかの煬帝ようたいである。

煬帝は国都長安の大興城や国土を南北に這う運河の建設を果たし、江南からの物資輸送を増大させ国庫を安定させた。しかしながら三度に渡る高句麗遠征の失敗が隋と煬帝の失墜へとつながっていく。その第一次征遼之役が発布されたのが大業七年（西暦六一一年）、鐘離郡に生まれた花木蘭かもちらんが十七歳を迎えた春のことであった。

堤防の上から眺める水面は静かに下流へと進んでいく。それこそ

が、煬帝が百万の人夫を国中から集めて掘らせた運河なのである。花木蘭が十歳を過ぎた頃、豪華な巨船に乗った煬帝がこの運河を全長二百里にも及ぶ船列を率いて進む様をまさにこの場所で目にしたのだった。文武百官と多数の美女を従えて船首に立つ煬帝の姿を見た時、木蘭は何故か畏怖を覚え傍らの父の手を握り締めた。それでいてなお木蘭の瞳は、華麗に着飾り堂々と胸を張る煬帝を捕えて離すことができなかった。

そのころよりも背丈は伸び双胸も膨らんで、木蘭は少女から大人へと成長しつつあった。文帝の時代に平陳之役に参戦した父は、負傷して故郷に帰り妻を娶った。脚を引きずる身であった父は他家の男のように働くことが出来なかったため、役所の仕事を手伝ったり街の子供たちに武芸を教えたりして生計を立てていた。やがて生まれた木蘭に対し、父は子守がてら道場で男の子たちと共に武芸を手ほどきして育てたのである。

天賦の才に恵まれていたと誰もが賞賛する。木蘭に武芸で勝てる男は鐘離郡には誰も居なくなっていた。各戸に一人十七歳以上の男を兵役に出すようにと、役所から軍牌が配布されたのがちょうどそんな頃である。木蘭と同世代の男たちは次々と戦へと駆り出されていった。

木蘭には兄も弟もない。したがって脚の不自由な老父が、再び戦場に立たねばならなくなったのだ。お前が男なら、父も母もそうは言わなかった。だが木蘭こそがその思いを強く胸に抱いていたのである。学問所で年長の男子の喧嘩を止めたことも、遣いに出た繁華街で酒屋の娘に狼藉を働く酔漢を棒で打ち据えたこともある。腕に自信はあった。戦の話も幼い頃から父に何度も尋ねて教わっていた。武芸が巧みなら戦場で必ず生き残れるものとはけっして考えてはいなかった。

道場でついぞ木蘭に勝てなかった若者が意気揚々と旅立って行く姿を、木蘭は臍をかむ思いで見送ったのである。彼らの無事を祈りつつ、父が出征すればおそらく生きて帰れまいと悲嘆に暮れていた。

何故自分は男として生まれてこなかったのだろう、軍牌が届けられた日から木蘭はそのことばかり考えていたのである。

堤防を歩いて水辺まで下りて行った。午後の日差しを弾き返す水面を覗き込む木蘭の顔が映し出されていた。母の元に持ち込まれた縁談が一再ではないことは木蘭も知っていたが、今この時に他家へ嫁ぐことなど木蘭には考えられなかった。父を戦場に送り出したくない、自分が代わりになりたいと思う悲痛な思いが木蘭の表情を陰しくさせていた。

それは突然に起こった。風が吹いたわけでも雨が降ったわけでもない。だが水面が突如波打ち、木蘭とは別の女性の顔が浮かび上がった。驚いた木蘭はまじまじとその顔を見つめる。その女性は自分よりやや年長なのかもしれないが、まるでほんの少女のように無垢な笑顔を浮かべていた。瞳の色は青く、髪の色は亜麻色である。父に聞いた西方にある敦煌の街にはさらに遙か西の国からやって来た亜麻色の髪の舞姫が居るとのことだが、ではなぜその舞姫が水に映っているのだろうか。

そう思った途端、水面に光の輪が浮かんだ。そして輪の内側の水がそれこそ鏡のように固まり煌き始めたのである。驚いて身を引いた木蘭の目の前で、その水鏡の中から亜麻色の髪の女が飛び出してきた。青と白の生地で織られた衣服は木蘭の着る物とはまるで異なっていた。空中から羽毛か綿毛のような軽さで河岸に下りてきたその女性は、地べたに座り込んで呆然とする木蘭に春の日差しに負けず劣らず暖かい笑顔を向けてこう言ったのだった。

「初めまして。わたしは天上界のお助け女神事務所からやって参りました、女神の？？^{ベルダンデー}丹蒂と申します」

軍牌を手に県庁へと赴いた花木蘭は、今度は徴兵官が発行した軍票を懐に収めた。約百人の従軍者が揃うと、そこから千五百里離れた？郡まで徒歩で旅をするのである。

従軍者たちの身なりはまちまちである。正式に入隊したわけではないから統一された武装をしているわけではない。古びた鎧を纏い痛んだ剣を手に歩く者もいれば、木綿の装束のみの者もいる。征遼之役が発令され騎兵が次々と北へ送られてからというもの、地方の治安は悪化の一途を辿っている。中には従軍者がそのまま脱走して野盗と化す例もあるため、木蘭たちの一団も武装した者が集団の外側を歩き襲撃に備えるという有様であった。

木蘭の装備はかつて父が平陳之役で使用した物である。古い物であるがよく手入れがされていて痛みはほとんど見当たらなかった。

河原から家へと戻った木蘭は、物置へと飛び込み父の鎧を引つ張り出した。一通りの武具を装着すると母屋に戻り両親に向かって宣言したのである。

「わたし、お父さんの代わりに戦に行きます」

それから深夜まで木蘭は両親を説得した。当然両親は反対した。

木蘭が戦場に行つて生き残れるはずがない、いや戦う以前に女の身で無事に居られるはずがない。両親は繰り返して説得したが、木蘭も引き下がらなかった。自分が行かなければお父さんが無理やり連れ出されることになり、それでも従軍が不可能となれば刑罰を加えられることになるだろう。そうなれば残された自分もお母さんもどの道まともに暮らしていくことは不可能になる。自分が戦に行く以外家族が無事で済む方法は無く、そして自分は如何にしても生き残るつもりである。そう強く宣言して、木蘭は両親を説き伏せた。

翌朝、不安げに見送る両親に向かって木蘭はこう言い残して旅立った。

「わたしには崑崙の仙女が味方してくれているから大丈夫」

襲撃は突然だった。森林地帯に差し掛かった所で、約三十人の野盗集団が武器を手に喚声を上げて木蘭たちに襲い掛かった。百人からの従軍者たちの中でまともに武装している者の数は野盗よりも少なく、武器を構えて立ち向かった者は更に少なかった。木蘭は迷わず腰間の古い剣を抜き構える。だが襲いかかる野盗も飢えに苦しみ、

木蘭たちの持つわずかな食料を狙って必死なのである。その時点で戦いは木蘭の想像を超えていた。道場での稽古のように順序良く挑んでくるわけでもない。たちまちに木蘭は取り囲まれて、野盗の棍棒や素手に打ち据えられんばかりとなってしまうた。

しかし怯えた木蘭を躍起になって追い回していた者たちは、仲間が他の従軍者たちに次々と倒されているのに気付かなかった。中でも四角い顔に鼻髭を生やした巨漢と髪を逆立てた黒衣の男二人が派手に暴れ回り、木蘭を取り囲んでいた者たちはあつという間に殴り倒されほうほうの体で逃げ出したのである。

「怪我は無いか」

そう尋ねながら鼻髭の巨漢が、座り込んでいた木蘭の手を握り立たせてやった。木蘭は声を聞かれて女性であることを疑われないように極力話すことを避けていたため、この場でも敢えて謝意は口にせず無愛想を装った。しかしその努力は巨漢に伝わらず、彼は木蘭に向かって遠慮の無い一言をつぶやいたのである。

「女子こせいのような手だな」

？郡に到着した花木蘭は正式に征遼軍に編入され、薛世雄せつせいゆうの率いる歩兵部隊の一員となった。河沿いの宿営地で一夜を明かし、翌朝には万里の長城を東に越えて高句麗へと向かう。荒野の地平線に沈み行く夕陽を見ながら父母のことを思う木蘭に、二人の男が声をかけてきた。

「同じ隊に配属されたようだな」

表情を引き締めて木蘭が見据えた先に立つのは、ここまで共に旅してきた鼻髭の巨漢と髪の逆立った黒衣の男だった。

「俺の名は田宮寅でんくういん、猫実郡から来た」

「同じく大滝彦だいろうげんだ、よろしく頼む」

そう名乗られてはさすがに黙ってやりすごすわけにはいかない。

「花木蘭、鐘離郡の生まれだ」

道中名乗らぬまま？郡までやって来たため、二人ともここで初めて木蘭の名を知った。

「ふむ、顔立ちだけでなく名前も優しげだな」

大滝彦が率直な感想を述べたのに対し、木蘭は表情を変えなかった。事實は決して知られぬようになっていくが、それでも女のようにだと言われては気にせずにはいられなかった。それからこの男二人は木蘭に向かっているいろと語りかけてきた。田と大は数年前に学問所で始めて出会ったこと、この度の戦が初陣ではなく煬帝親征ようたいによる吐谷渾討伐に参加したことがあること、その後郷里に帰りそろうて師の下で土木工事の技法について学んでいたこと、師が亡くなり身の振り方に迷っていたためこの度従軍したことなどを話して聞かせた。

木蘭は時々相づちを打ちながらも、何か質問したりはしなかった。声や口調で女と思われるのは得策ではなく、どうせなら先ほどの大滝彦の言葉で機嫌を損ねた振りをしておいた方がよからうと考えた。

そうしていれば話しに飽きて立ち去るだろうと思っていたが、二人は自分たちのさして長くもない半生を延々語っていた。夕陽が半分の地平線に隠れるまで話し続け、ふいに田宮寅が話を打ち切った。

「暗くなる前に身を清めておくか」

「そうだな」

大滝彦も同意し、上半身裸になり下衣を膝まで捲り上げると二人してざぶざぶと河へ入っていった。木蘭が赤面しながら見守る中、二人は手拭いを水に浸して強く絞ると筋肉隆々とした肢体を丹念に拭いていった。

「お前も相当に汗をかいているだろう、一緒に体を拭いておかんか」
田がそう言つて木蘭を誘った。その口調にいやらしさなどは無かったのだが、木蘭が躊躇したのもまた無理からぬことである。そんな木蘭の内心を知るはずも無く、大もまた声をかけるのである。

「高句麗への進軍が始まれば飲み水も思うように口にできん、ここで体を清めておかぬと後悔することになるぞ」

「それとも服を脱げぬわけでもあるのか」

田のその一言が木蘭の負けん気に火をつけた、のかどうかは正史に記されてはいない。木蘭は無言で立ち上がると上衣を脱ぎ捨てて河に入った。その胸に乳房は無く、細身ながら引き締まった胸板を木蘭は手拭いでしっかりとこすった。そして今一度手拭いをすすいで絞り、今度は下衣に手を突っ込んで下半身をゆっくりとこすった。木蘭は自分の下半身に数日前からぶら下がっている物の感触に未だ慣れていなかった。女性としてこの世に生まれて十七年、幼い頃風呂場で見た父の物以外に目にしたことのない男性の象徴が自分の股間に生えていることを、木蘭はその感触で実感したのである。

出征すると両親に宣言した数刻前、運河のほとりで突然木蘭の目の前に現れた美しい女性はこう告げたのである。

「花木蘭さま、あなたの願いを叶えてさしあげます。ただし、一つ

だけに限りますけど」

天上界だのお助け女神事務所だの、その女性の言った言葉は木蘭には全く意味がわからなかった。しかし同性でありながらも惹かれてしまうその美貌と、優しさと誠実さを感じさせる口調に、木蘭はこれこそ伝説に聞く崑崙の仙女に違いないと信じたのである。それならばと木蘭は、^{ベルダンデー}丹蒂と名乗る仙女に自分の思いの丈をぶつけた。

「わたしを男にしてほしい、そうすればわたしは父の代わりに戦に行くことができる」^{ベルダンデー}

その言葉に^{ベルダンデー}丹蒂は表情を曇らせた。

「従軍するとおっしゃるのですか、生きて帰ることはできないかもしれないのに」

木蘭は何も語らず、じつと仙女を見つめていた。青い瞳に悲しみを浮かべて^{ベルダンデー}丹蒂は木蘭を見つめ返したが、彼女の決意が揺るがないと悟ると胸の前で両手を組みまぶたを閉じた。額に描かれた紋章が輝き、そこからあふれた光が仙女の身を包んでいくのを木蘭は見た。その光が一筋の矢となって天に昇り、上空で雲を突き破った。呆然と見上げていた木蘭に向かって、今度はその光の矢がまっすぐに落ちてくる。かわす間もなくその矢に射抜かれた木蘭は地に倒れ伏した。そして起き上がった時にはすでに自分の体が変化していることに気がついたのである。

「あなたの戦いが終わった時、元の体に戻してさしあげます。それまでどうかご無事で、ご両親のためにも手柄より生き残ることに全力を注いでください」^{ベルダンデー}

そう言い残して^{ベルダンデー}丹蒂は姿を消したのである。

煬帝率いる百三十万の征遼軍は、万里の長城を越えて遼河西岸に到達した。その中には当然花木蘭の姿があり、その両脇には田宮寅と大滝彦が太い腕を組んで屹立している。この時まで彼らは隋軍の一兵卒に過ぎず、煬帝の目にも正史の記述にも留まっていはいない。

迎えうつ高句麗軍は六万、正面からまともに戦えば一撃で粉砕さ

れてもおかしくない兵力差である。そして隋軍には麦鉄杖、来護児、楊義臣と言った歴戦の宿将がそろっている。遼東城に籠る乙支文徳率いる高句麗軍などすぐに蹴散らし麾下の軍勢が国都平壤城へ一気になだれ込む様を想像しながら、煬帝は本陣で美食に耽り美女と戯れていた。

しかし戦場の兵士にとっては決して安楽にことが運んだわけではない。隋軍の到着前に遼河にかかる橋は全て破壊されており、渡河と浮橋建立を同時に進めた隋軍に対し高句麗軍は豪雨の如く矢を射かけた。激流を血色に染めながらも隋軍はついに対岸へと渡り、高句麗軍を追い立てつつ遼東城に肉薄する。高い外壁に衝梯を掛けて這い上がる隋兵に、遼兵は必死で攻撃を仕掛ける。

攻守三倍とも言われるが圧倒的な兵力差にも関わらず高句麗軍は実に二ヶ月以上持ちこたえた。その理由のひとつには隋に協力する百済が、入手した軍事情報を内密に高句麗へと伝達していたことがある。そしてまた、この時点で執政者としては一定の成果を上げていた煬帝が、軍事にはさほど秀でていなかったことも理由であったろう。幕下の将帥がその点を進言せぬわけではなかったが、現実に補給の体制は十分に執られなかった。麦鉄杖が先陣を切つて渡河したところで敵の鋒にかかって戦死し、激しい攻城戦において沈光が華麗な剣技で次々と高句麗兵を斬り捨てるなど、前線の様子に氣をとられていた煬帝は補給について思慮を十分に巡らせていなかったのである。

日を追って隋兵は疲労と飢餓に苦しめられ、それでも遼河を越え遼東城を落とし平壤城を目指して進軍した。その間に花木蘭は田宮寅、大滝彦と共に戦い続けていた。途中三人は不足した騎兵を補うべく配属を変えられる。木蘭は一頭の白馬を与えられ、やはり田と大の二人と並んで戦場を駆け巡ることとなった。しかしながら左衛將軍たる宇文述は平壤城を護る乙支文徳の柔軟な防御策を前に攻めあぐね、水軍を率いる来護児は地上部隊との連携を欠き、結果数の上で圧倒的優位を誇るはずの隋軍は糧食尽きて遂に撤退を図ること

となつたのである。

右衛將軍の薛世雄が殿軍を務めることとなり、勲功を煬帝直々に賞賛され折衝郎將に任じられた沈光の部隊がこれに合流した。

征遼の大軍が我先にと故国を目指して退いていくのを、当然高句麗の將兵は黙って見逃さなかつた。国土を蹂躪され、町や村を焼かれた恨みを晴らさんとばかりに剣や檄で襲い掛かる。乙支文徳としてもここで可能な限り隋軍へ被害を与え、再度の侵攻の意思を挫いておきたいところである。薛世雄と沈光はこれを果敢に迎えうち撤退する友軍を守つたため、手勢の半数以上を失つた。

沈光が最後の反撃に討つて出る。薛世雄は残つた配下から若い兵を沈光に貸し与え、その中には木蘭と田宮寅、大滝彦の三人も含まれていた。苛烈な逆撃に追走を躊躇した高句麗の兵に、薛世雄の指揮する弓兵隊が残つた矢の全てを射掛ける。その隙に沈光や木蘭は馬を返して駆け出し、そのまま薛世雄の本隊と合流して隋領へと逃げおおせたのだった。

空腹と疲労に耐えながら、木蘭は白馬に揺られて？郡を目指した。撤退戦に生き残つた勇猛な者ですら飢えに耐え切れず、半数以上が帰還の途上で命を落とした。木蘭は彼らの呪詛の言葉、高句麗にではなく煬帝に対する恨みを聞きながらも、埋葬すらしてやることができなかつたことを悔やみながら進んでいた。

意識が朦朧とするが、白馬が田と大の背中についていくので木蘭ははぐれることなく？郡まで帰り着いたのである。ようやく水とわずかな粥を口にして人心地ついた時、木蘭は尊大な口ぶりの官吏に呼び出された。武牙郎の地位を与えられ、折衝郎將沈光の副使の一人として任官されたのである。戦が終わって故郷に帰れると思つていた木蘭は官吏に抗議したが、いきなり背後から両腕をつかまれ引きずり出されてしまった。田宮寅と大滝彦だった。

同じく沈光の副使に任じられた彼らの口から木蘭は情勢を教えられた。国庫と臣民に相当の負担と賦役を強いて敢行された征遼之役が、敗北と言う最悪の結末に至つたことで隋の各地では叛乱が相次

いでいるという。瓦解した官軍を再編するのは叛乱勢力鎮圧のためと、高句麗から帰った者がそのまま叛乱軍に流れ込むことがないようにとの措置なのである。木蘭は完全に当てが外れてしまったのだった。

「今のところは鐘離郡も猫実郡も平穏だ。だが状況が悪化すればすぐまた徴兵が始まるに決まっている。このまま残れば全軍の再編が済むまでは徒食ただめしにありつけるし、戦上手の沈郎将の麾下にあればそう悪いことにもなるまいよ」

どこから聞きつけたかはわからなかったが、大滝彦が意外に情報収集に長けていることは木蘭も共に戦ってきてよくわかっていた。従軍を続けることに不安は大きかったが、仕官していれば父が徴兵されることはないし、俸禄を両親に送ることもできるはずである。大の言う通り、当面はそう悪いことにはならないのではと木蘭は決断した。しかし……。

「高句麗であれだけ苦しんだと言うのに、これからまだ戦が続くのか」

木蘭がそうつぶやくと、田宮寅は遙か長安の方角を眺めながら答えたのだった。

「皇帝陛下がそうすると言うのであればな」

首都長安を指して西都と呼ぶ。これに対し洛陽を東都と呼び、この地にも皇宮が設けられていた。仕官した花木蘭が沈光の下で田宮寅、大滝彦と馬を並べて叛乱勢力と刃を交わしている間に、煬帝は各地から容姿端麗な娘を洛陽へとかき集めさせていた。王薄や竇建徳と言った領袖が台頭する中、煬帝の後宮は次々と新たな麗花で満たされていったのである。あるいは木蘭も仕官を避け郷里に帰っていたならば、出世を望む地方役人に捕まり後宮に納められてしまつたのかもしれない。

ちなみに煬帝の母、独孤皇后は嫉妬深く夫である文帝のみならず重臣たちにもまで側室を持つことを禁じたことで知られる。母の生前は質素に振舞っていた煬帝が次第に華燭に溺れていくことについて、正妃である蕭皇后は特に何も言うことは無かつたようである。

大業九年（西暦六一三年）、洛陽の皇宮で臣下が新年祝賀の拝謁に集まる中、煬帝は第二次征遼之役の勅令を発したのである。百官はことごとく慌てふためき、玉座の前は騒然となつた。全軍の三割以上の将兵が異国の地に屍をさらすこととなつた高句麗遠征の敗北を、煬帝は簡単に受け入れる気はなかつたのである。列将の筆頭格であり古老の廷臣である薛世雄が、出征に対しおずおずと反対の意を示した。だが煬帝は露骨に顔をしかめ老臣の苦言を無視した。こうして高句麗への再征は決定したのである。

右衛將軍は薛世雄、そして敗戦の責任を問われ官位を剥奪されていた宇文述が再び左衛將軍として指揮を執ることとなつた。賊軍討伐の殊勲により官位を進めた沈光は志願兵や新兵を含む部隊を指揮し、副使たる木蘭もより多くの騎兵を従えて戦場を駆け巡ることとなるのだつた。

第二次征遼之役については、どれだけの兵が動員されたのか正史に記されていない。しかし一年とおかず徴兵を行つたとあれば先年

と同数の軍勢をそろえられたとは考えにくい。仮にその半数であったとしても、六十万以上の軍勢が再び高句麗の地を目指し荒野を走ったのである。隋国内の各地では二年続けての徴兵で働き手を失い、かつ糧食の徴収で村々は飢えに苦しんでいた。穀物の不作は天候不良によるものでもあったのだが、飢餓に苦しむ民衆はそれも全て煬帝のせいにして不満を募らせていった。

遼河の対岸で陣を構える高句麗の將軍乙支文徳いっしぶんてくは、弓兵隊や投石器を操る部隊を充実させて隋軍を迎えつつ。一年と間を置かず再度高句麗を目指した隋兵は、先年より行軍速くそれに比して戦意は低かった。複数の地点から渡河を試みるも片っ端から高句麗軍の放つ矢に射られ倒れていく。その中で沈光と彼に従う田宮寅、大滝彦がいよいよ遼河を渡り高句麗兵と剣を交え始める。

出遅れた木蘭は薛世雄からの伝令を受け、その内容に驚きつつも前線へと走り主将である沈光に老将の撤退命令を伝達した。渡河する時の倍以上の兵を失いつつ、沈光以下の部隊は隋領へと引き返した。今回もまた百済の密偵から情報もたらされ、乙支文徳は隋軍を深追いすることなく自軍を退かせたのだった。

薛世雄や宇文述は豪華絢爛たる楼車に乗る煬帝を護りつつゆつくりと洛陽へと向かい、沈光は再編した騎兵部隊を従えて煬帝の楼車を追い越して斉郡を目指した。征遼軍の後方にあつて補給の任に当たっていた礼部尚書楊玄感ようげんかんが、突如煬帝に叛旗を翻したのである。

楊玄感の父、楊素ようそは文帝の御世から隋の重臣であった。文帝の死については煬帝による殺害説がまことしやかに囁かれ、楊素も保身のため煬帝に手を貸したと噂されている。とは言え唐代に書かれた正史ですら、煬帝が陰謀を持って文帝を死に至らしめたとは記していない。死の床にあつた文帝が煬帝廃嫡の詔を発したが、それは公表される前に楊素の手に落ちた。

そのような状況で敢えて煬帝が危険を冒す必要はない。父殺し、

皇帝殺しの汚名を好んで被らずとも、待っていれば帝位は彼の手
に転がり込むのであったから。そうして受け継いだ国の蓄えを、度重
なる出征と無用の行幸で彼は使い果たした。民に苦役と徴税を課し
続けた結果、父の築いた帝国を即位後わずか十五年ほどで滅亡せし
めたのである。そのため彼は没後、民を害し天に背いた帝との名を
おくられるのである。

煬帝即位後も隋の重臣であった父の跡を継いだ楊玄感であったが、
爵位こそ留まったものの父ほどに重用されはしなかった。煬帝に諫
言した廷臣が処刑され、あるいは特に理由も無く解任され家ごと取
り潰されたりしたのを遠目に見て楊玄感は不安に陥っていた。

若い時から武芸にも学問にも優れ、雄雄しい体躯と美髯を持つ偉
丈夫は煬帝の影に怯えていた。先の征遼之役で武勲を上げられず、
今回は後方で補給の任に当てられた彼は荒野の陣地で春の月を見な
がら決意したのであった。征遼軍の前線が敵陣深く伸びる頃合を囚
りつつ、楊玄感はいぶかる現場指揮官の声を無視して補給を滞らせ
た。そして突如自軍を黎陽まで後退させると、煬帝の打倒を天下に
宣言した。

沈光の命令で先発した木蘭が黎陽に到着する前に、楊玄感の軍は
洛陽に向けて進軍し衛玄率^{えいげん}いる官軍を叩き潰した。無益な戦で民を
苦しめる煬帝を非難する彼の下に、昨年からの叛乱勢力や煬帝に地
位を追われた貴族官吏が続々と集まったのである。叛徒の軍はにわ
かに膨れ上がり、その様子を木蘭は遠巻きに眺めるしかなかった。
やがて沈光と田宮寅、大滝彦が本隊を引き連れて合流する。そして
同刻、楊玄感の下を一人の男が訪れていた。

「よく来てくれた、そなたの叡智に期待するぞ」

楊玄感はそう言つて李密^{りみつ}を軍師として迎え入れたのである。李密
は蒲山公李寬^{りかん}の子であり、武川鎮軍閥の末裔である。隋にあつては
名門であったが、煬帝に「目つきが気に入らない」との理由で宮廷
を追われたのだった。自らの才気に負うところの大きかった李密は、
黄牛の背にまたがり漢書を読みつつ長安の街を行きながら心楽しま

ぬ日々を送っていた。そんな彼に声をかけ客人として家中に招き入れたのが楊素であり、李密は楊玄感と刎頸の交わりを結ぶことになったのである。

李密が楊玄感の下に馳せ参じたのはそう言った経緯があつたためでもあるが、何より彼は自分の才幹に絶大な自信を持っていたのだつた。それだけに煬帝の気まぐれで将来を奪われたことは彼の人生にとつて大きな挫折であつた。あるいは名門の出自であることも、煬帝への忠誠心を覆すことにつながつたのかもしれない。李密は楊玄感の拳兵を成功させるべく、あらん限りの知恵を尽くして策謀を立てた。楊玄感を皇帝として即位させ自らは宰相として国政を司る、賊軍の軍令をまとめながら李密はそんな思いを抱いていた。

生前の文帝が奇妙な夢を見たことがある。楊の木と李の木が枝を振り回し争っていたが、やがて楊が打ち負かされて倒れてしまいそこへ洪水が起こり流されてしまふという夢であつた。文帝が易者を呼んで占わせたところ、「いずれ李姓で？のつく名を持つ者が本朝に仇なす」との答えが帰つてきたのである。善政をもつて多くの臣民に敬われた文帝であつたが、この時は占いを気にしてある廷臣の孫を処刑させた。宮廷内では決して語られること無く片づけられた事件であつたが、市井に広まる噂話を食い止めることは有能な官吏にも抜け目無い宦官にもできはしなかつた。

その噂はかつて為すことなく長安の街をぶらついていた李密の耳にも入っていたのである。彼の字は法主あやなであつた。

来護児らいご、魚贄ぎょさん、陳稜ちんりょうらが軍勢を率いて次々と戦場に集まつてきた。楊玄感は十万の兵で洛陽を包囲していたが、陥落せしめる前に官軍二十万以上に取り囲まれる事態となつてしまった。

これは楊玄感と李密の意見が対立し、戦略の立案に時間を要したためである。流通の中心として物資が集まる洛陽を手中に収める楊玄感の実利的な作戦に対し、李密は東晋十六国や南北朝に於いても

その首都であった長安を占領し天下に大義を示すことにこだわったのだ。結局は楊玄感が押し切り洛陽攻略で決着したものの、東都の護りは固く攻めあぐねているうちに官軍が集結してしまった。

沈光が馬の腹を蹴って駆け出し、田宮寅と大滝彦、それに花木蘭が軍勢を率いて賊軍へと攻めかかる。ここに？水の戦いが始まったのである。二倍の兵数で襲い掛かる官軍の中で、真つ先に楊玄感へとたどり着いたのが魚賛であった。煬帝の側近魚具羅ウイグクノキの弟であり、彼自身も少年期から煬帝と共に遊び学んだ仲である。煌びやかな甲冑を着て馬の鞍にまたがり、敵陣の先頭部隊で指揮を執る楊玄感に斬りかかった。

魚賛は当初、陳稜と共に賊軍を正面から攻略していた。だが陳稜が敵陣深くに切り込んだ時、魚賛は途中から部隊を迂回させてしまった。たちまちに陳稜は敵兵に取り囲まれてしまい、そこにできた隙間を縫って魚賛は一直線に楊玄感のいる本隊を目指した。陽動に釣られて動いた賊軍は前へ前へと押し進み、楊玄感の周囲が手薄になる。魚賛は友軍を囿にして賊の主将を狙ったのである。

黒い甲冑をまとい三叉の檄を構える楊玄感は少しもうるたえはしなかった。魚賛の行動からその意図を予想していた彼は正面から迎えうつ。周囲の部下を散開させて敢えて魚賛の前に進み出ると、巨大な檄を縦横無尽に振るい次々と敵兵を斬り捨てた。

五十騎からの部下があつと言う間に倒れていく。冑を割られ腰から上を失い、胸に大穴を開けられた死体を目の当たりにして魚賛は慌てて引き返した。だが楊玄感は瞬時に追いつき、無言で魚賛の首を刎ねたのである。冑ごと飛んで行った魚賛の首は両軍の激戦の中に落ち、馬蹄に踏まれ跡形も無くなった。楊玄感ウイグクノキは敵将を討つたことを誇るでもなく、すぐに次の獲物を求め戦場を駆ける。叛乱軍は「項羽の再来」と楊玄感を賞賛し、意気高く官軍と戦うのであった。

勢いづく叛乱軍に宿将来護兒も手を焼いた。二倍の兵数でも楊玄感を討つことは容易でなく、宇文述が息子と共に征遼軍の一部を率

いて参戦する計画であることを知りつつも来護児は焦りを感じずにはいらなかった。

人間同士が平原で切り合い軍馬を疾走させる上空を、二つの影が高速で飛行していた。女神である？？ベルダンデー丹蒂がつむじ風を身にまとい光の槍を投げつける。それに対し黒皮の装束に赤いマントをなびかせた金髪の麗人が、闇の盾で槍を弾くと同時に瘴気の渦を巻き起す。渦の中から現れた無尽蔵の悪霊が女神の肢体に喰らいつかんと襲い掛かるが、？？ベルダンデー丹蒂が気合いと共に光を放つと悪霊はたちまちに消え去った。

「久しぶりだな、？？ベルダンデー丹蒂。よもやお前とこの中原でまみ見えることになるとは思わなかつたぞ」

「わたしもよ、？？マイラー。あなたが今この地にいるはずはないと思つていたのだけれど」

額に赤い二筋の紋章を浮かべる秀麗な顔立ちに、悪意と言うよりはいたずらっ子のような表情を浮かべて女神に対峙する存在は魔界の使徒であった。一級魔？？マイラー、彼女もまた人間の願い、それも邪なよこしま願望を実現すべく中層世界へ降臨していたのである。

「？？マイラーが両手に地獄の業火をまとわりつかせながら突進し、？？ベルダンデー丹蒂が青い光球を障壁にして受けて立つ。女神と魔属の力が激しくぶつかり合う足元では、人間たちのいつ果てるとも知れぬ戦いが繰り広げられていた。

「隋は滅びる、そしてこの国の人間たちを嘆きと悲しみのずんどこに叩き落すのだーっ！」

叫びつつ攻め立てる？？マイラーに、？？ベルダンデー丹蒂は次第に地上へと押し戻されていった。ふたりの姿は光学迷彩の術で人間の目に触れぬようになつている。周囲で剣を振るう両軍の人間は、すぐそばで女神と魔属が互いの波動を押し合つていることに気付いていなかった。

「？？マイラー、もしやあなたは文帝の見た夢を実現させるつもりなの？」

「そうさ、？？ベルダンデーのつく名を持つ李姓の者、すなわち李密法主と契約し

たのさ。奴はこれから行く先々で煬帝ようたいに叛意を抱く者どもをけしかけていくことになる。そうして隋は乱れ、数年のうちに戦乱の世が訪れるというわけさ」

「諱いみなと字あざなを併せて読むのは誤りよ」

ベルダンデー、マラー
「丹蒂はきつと??をにらみ返し、光の障壁とともに押し戻した。十数歩分の距離を空けて女神と魔属は対峙する。風は平原を吹きすさび、戦の喧騒と血の匂いが彼女たちを包むがふたりの間に割って入る者はない。」

「本来なら教える筋合いではありませんが、旧知の仲であるあなたに忠告してさしあげます」

ベルダンデー、マラー
「丹蒂のその言葉に、??は攻撃の手を止める。」

「忠告だと」

「そうよ、?のつく名を持つ李姓の者とは李密殿りみずいのことではありません」

「では誰だ、誰が隋を滅ぼすと言うのだ」

ベルダンデー、マラー
「一瞬だけ??丹蒂は右の方に視線を移したが、厳しい表情を崩すことなく再び??に語りかけた。」

「唐国公李淵殿りえん」

「何を馬鹿な、奴は隋の貴族でしかも文帝の妻の甥だぞ。今だって領地の叛乱勢力討伐に尽力しているではないか」

「信じないのなら結構です、いずれにせよ歴史の激流は神属にも魔属にも容易に覆せるものではありません」

ベルダンデー、マラー
「そう言つて??丹蒂は静かに身を引き、風と共に姿を消した。ふいに取り残されて呆然とする??だったが、その時になって地を揺るがす馬蹄の響きにようやく気がついた。」

「わあああああああ……」

ベルダンデー、マラー
「通り過ぎた馬群の先頭で、愛馬にまたがっていたのは田宮寅でんぐつゐんと大滝彦おほつげんだった。」

「何か聞こえたか」

「いや、何かを踏んだような気はしたが」

楊玄感を追って戦場を駆ける二人は、配下の騎兵と共に??を踏みつけてそのまま走り去った。後に残されたのは、巻き上げられた砂塵とぼろ雑巾のようになっただけだった。

「だ、大魔界長さまに叱られるう」

そう言い残して??も影と共に姿を消した。ちなみに魔属はこれくらいのことでは死なない。

宇文述が息子の化及、智及と共に戦場に到着した。官軍は失った兵力を補い、逆に叛乱軍は徐々にその勢いを失っていった。楊玄感の弟玄挺が鼻の下に矢を受けて落命し、左翼が一気に瓦解した所を来護児の軍が襲い掛かる。叛乱軍の兵士が次々と倒れていくが、楊玄感の周囲だけは官兵の死体が積み上がっていった。もはや官軍はただ楊玄感を捕えるためだけに攻めていると言っても過言ではない。だが彼は一向に疲労を見せず戦い続け、隋の宿将たちを心胆寒からしめたのである。

「行くぞ、大ちゃん」

「ああ、田ちゃん」

主将沈光と別行動を取っていた田宮寅と大滝彦は、遂に楊玄感を取り囲むに至ったのである。恐れる配下の兵に包囲陣を固めさせ、二人は豪剣を振り回して敵の猛将に突進していった。田の振り下ろした剣を楊玄感は櫛の矛先で受け止める。両者とも負けず劣らずの巨漢であり、その膂力は拮抗していた。互いに押し合って動かぬ二人の間に大滝彦が斬りかかる。楊玄感の櫛の柄が真ん中からへし折れるが、よるめきつつ大滝彦の足を払う。大が田にのしかかって倒れ、その隙に楊玄感は剣を抜く。

起き上がった朋友の尻を田が蹴りつけ、大滝彦は楊玄感の予想以上の速度でぶつかってきた。よるめく楊玄感の顔面を大滝彦は力いっぱい殴りつける。楊玄感は握った剣の柄で殴り返し、さらに大に斬りかかろうとした。だが田宮寅に左足の太腿を斬りつけられ激痛

に顔をしかめる。大滝彦が振り下ろした剣が、楊玄感の右手を切り落とす。鮮血を飛び散らせながらも大の腹を蹴り、左手で死兵の槍を拾い上げ咆哮と共に田を狙う。田は脇腹を傷つけられながらもその槍をつかみ楊玄感の動きを止めた。

大が楊玄感の背後から鎧の隙間に剣を突きたてる。激痛に吠える楊玄感に大滝彦がのしかかり、鎧をまとった猛虎は地面に倒れ伏した。そこへ田宮寅が剣を振り下ろし、遂に叛乱軍頭目の首を取ったのである。

楊玄感、出生した年の記録が無いので享年は不明であるが、隋の名族であり重臣の子として生まれた彼は反逆者として戦死したのであった。

花木蘭は沈光と馬を並べて逃げる李密を追っていた。騎手の体重が軽いため木蘭の白馬は沈光の馬より、そして李密の馬よりも速く走った。追いつがる木蘭が馬上から細身の剣を振り、李密はそれを軍師の鉄杖で打ち返した。何度も打ち合い二人の間で火花が散り、恐れ興奮した馬は更に速度を上げて走る。

突然李密の馬が転倒し、彼は地面に放り出された。沈光の放った矢が寸分違わず馬の首に命中したのである。馬を即死させたのは彼の慈悲であったかもしれない。だが落馬した軍師の方には情けをかけるつもりは無く、木蘭と二人で李密の喉下に剣先を突きつけた。

降伏した李密は駆けつけた兵士に縄をかけられ連行された。本陣で宇文述と来護児に審問された後、馬車で長安へと護送された。だが彼は護送の兵を言葉巧みに誘い、途中の宿場で所持金をはたいて酒食を振る舞った。兵たちが大酔したところで脱走を果たし、その後各地で隋に叛乱を起こす者たちの下を回り軍略を手助けた。李密が生き延びられたのは、あるいは魔属の加護であったのかもしれない。

後年彼は河南一帯を勢力下に収めるまでになるのだが、隋に背いた叛乱軍同士の戦いに破れその軍門に下った。李密を従えた者こそ唐国公李淵、後に大唐帝国を興した高祖であった。唐建国に際して李

密は？国公に任じられたのであるが、結局は謀反を誣告され高祖の命により斬首されたとのことである。

解放された洛陽に煬帝が帰還した。賊将楊玄感の首級を取り第一級の軍功を上げた田宮寅と大滝彦は、皇宮へ召し出され煬帝直々に褒章を受けたのである。主将たる沈光に花木蘭も同行を許された。

この時木蘭は約八年ぶりに煬帝の顔を見ることとなった。居並ぶ廷臣の最後尾に並んでいたので遠く離れていたのだが、その代わり玉座の前の田や大のようにひざまづく礼節を免れたのだった。木蘭の視線の先で戦友に玉声をかける煬帝の年齢は四十代半ばであるが、故郷や軍隊にいる同じ年代の男性より不健康そうで皇帝の威光と言うような物は感じられなかった。それでいて、少女の頃運河で煬帝を見かけた時と同様の胸の鼓動を覚えたのである。

この勲功により田宮寅は折衝郎将に任じられ、併せて河南討捕の勅命を受けた。つまり黄河流域南部の叛乱鎮圧であり、大滝彦と花木蘭をその副使とするとも発表された。木蘭は隣に立つ沈光に視線を送る。田が大軍を指揮する身になったことに否やはないが、それでは沈光の立場はどうなるのであろうか。

木蘭の疑念はすぐに解消された。煬帝はその場で翌年に高句麗に進軍することを発令したのである。第三次征遼之役である。宇文述と、老いて前線を退いた薛世雄せつせいゆうに代わり来護児が全軍を指揮し、煬帝自身も親征すると文武百官を前に宣言した。

皇宮は一気に静まり返る。随書煬帝記には「三度征遼の師を起すべし、数日敢て言う者なし」と記されている。従軍することを事前に知らされていた沈光は、木蘭の肩を軽く叩いてその場を立ち去ったのである。

その夜のこと、田宮寅と大滝彦は褒章と共に下賜された金子かねこずで部下たちに御馳走と酒を盛大に振る舞った。派手な酒宴がようやく終わっても、戦から解放された洛陽の歓楽街はまだ賑わっていた。

「今夜の寢床はどうするつもりだ」

男たちが酔って騒いで歌って裸で踊る宴会に辟易していた木蘭は、いらだちを隠さず田と大にそう尋ねた。千鳥足の二人はそれでも迷うことなく歩いていくので、木蘭もしぶしぶついて行く。情報通の大滝彦にはどうやらそれなりの当てがあるようだし、歓楽街のことなど木蘭にはさっぱりわからなかった。

「今夜はここで寝る」

大がそう言っ指し示す館を見て木蘭は啞然とした。

「こ、ここは妓館ではないか」

「そうだ、この歓楽街で最高の妓館だ。洛陽一美しい妓女、酒も夜食も高級品、おまけに風呂までついている。ここで朝までたっぷり楽しむぞ」

どうやら大滝彦はすでに予約を入れているようである。

「今日は我ら三人にとって晴れの日だ、今宵の宿には洛陽一の妓館こそふさわしい」

田宮寅もすっかりその気である。

「い、いやわたしはいい、褒章を受けたのはお前たち二人なんだからお前たちだけ楽しんでくるといい」

「貴様！っ、今日の喜びを歴戦の朋であるお前と共に分かち合おうという我らの温情がわからんか」

「分かち合わなくてもいい、わからんでもいい！」

女神の術で男の体になったとは言え、小柄な木蘭は巨漢二人に担ぎ上げられ無理やり妓館に同行させられてしまったのであった。案内の下女に導かれ三人は最上階に上がる。木蘭は田と大に強引に個室に押し込められ、何をどうすればいいのか全くわからないまま畏まる妓女の前に正座した。

「あ、あの、わたしはその……」

「お久しぶりでございます、木蘭さま」

そう言っ顔を上げた妓女の顔を見て、木蘭はようやく落ち着きを取り戻した。

「ベルダンデー
???」丹帝ではないか、どうして!!!」

「お久しぶりでございます、木蘭さま^{もくらん}」

^{ベルダンデー}「??? 丹蒂ではないか、どうしてここに」

「木蘭さまがお困りのようでしたし、わたしもお会いしたかったものですから」

顔を上げた彼女は、およそ一年半前に故郷の運河で出会った仙女であった。彼女は最上階に来るまでにすれ違った彼女と同様の艶やかな衣装を身につけていた。鳳凰を刺繍した上質な絹地で、胸元や脇が広く開き素肌が見え隠れする。元々女性である木蘭だが、永らく戦場にあつたため彼女などとは全く縁が無い。先ほどはすれ違ふときどきしていたのだが、同じ衣装でも??? 丹蒂が身につけると不思議と清楚に見えるのであつた。

立ち上がり木蘭を奥へと招きながら^{ベルダンデー}「丹蒂が話しかける。」

「戦が長引くようですね」

「ああ、皇帝陛下はどうしても高句麗を攻めたいようだ」

暖簾をくぐり抜け豪華な浴室へと案内すると、^{ベルダンデー}「??? 丹蒂は木蘭の衣服に手をかけた。」

「な、何をするのだ」

「お体を一度元に戻します。変容体を長く続けますと木蘭さまの存在に支障が出てまいりますので」

手際よく脱がされてしまった木蘭であつたが、服の下から現れた裸身は元の女性のものだった。そして^{ベルダンデー}「??? 丹蒂自身も一糸まとわぬ姿となり湯船の傍で桶や手拭をそろえていった。」

「こちらへどうぞ、お体をお清めいたします」

「いや、そんなことは自分で」

「よろしいではありませんか、元々そういう場所ですから」

^{ベルダンデー}故郷を出て以来まともに入浴などするのはこれが初めてであつた。??? 丹蒂の手で懇切丁寧に全身を洗ってもらい、木蘭もまた彼女の

背中を流してあげた。そしてふたりで熱い湯に浸かりながらしばしの談笑した。

風呂から上がった木蘭に^{ベルダンデー}「丹蒂が酒を勧める。

「お食事はいかがですか」

「もついいよ、それよりも歌を聴かせてくれないかしら」

酌を受けながら木蘭はそうお願いしたのである。

「故郷の、鐘離郡の歌が聴きたい」

「はい、それでは」

^{ベルダンデー}「丹蒂は傍らの琵琶を手に取り鮮やかな指使いで爪弾いた。軽

やかな調べに合わせて、木蘭が子供のころから親しんでいた節を^{ベルダンデー}？

丹蒂は歌って聴かせたのである。木蘭は気持ちのいい音色を聴き、

時間を止めた魔法にかかったように眠りについた。女神のやさしさに

包まれて、父と母と一緒に平穩に暮らす夢を見た。やがて差し込む

朝陽を感じ目覚めかけた時、額に軽く口づけをされたような気が

したのである。

木蘭が布団をはねのけると身体は再び男のものに変わっていて、

^{ベルダンデー}「丹蒂の姿はどこにも見えなかった。

それから木蘭の戦場は隋国内の黄河南岸一帯となる。河南討捕の

最高責任者である張須陀^{ちようすだ}の采配に従い出勤する日々であった。田宮^{でんぐう}

寅^{いん}と大滝彦^{だいろうげん}の戦術は基本正面突破であり、集結しつつあった叛徒を

緒戦で叩くことで叛乱勢力の拡大を防いでいた。

明確な指示を大声で叫びつつ、常に陣頭に立って兵士たちの信頼

を集める田宮寅。面妖で何を考えているかよくわからないものの、

情報収集に長けた確かな判断を下す大滝彦。二人の戦術指揮で叛徒鎮

定に大きな成果を上げていき、一年ほどで彼らは更に格を上げより

多くの軍勢を率いることとなっていったのである。

木蘭は補給や伏兵の任に就いて彼らを補佐していた。地味な任務

を坦々と、しかし確実にこなす木蘭に田と大の信頼は大きかったが、

豪放磊落な人柄で軍を仕切る主将と副将に比べ木蘭の存在は兵たち
にいささか軽んじられていたようである。木蘭は一步退いた立場か
ら目の前の戦場と、変わり行く隋の情勢を見つめていた。

大業十年（西暦六一四年）三月、煬帝は数十万の大軍を再編し？
郡から万里の長城を越えて高句麗に侵攻した。夏に遼河まで至り渡
河作戦を敢行する隋軍に対し、高句麗軍は対抗できなかつた。三年
続けての侵攻は隋兵と隋国民に多大な負担を強いたのだが、攻めら
れる方の高句麗もそれは同様である。まして国力に遥かな隔たりが
あり高句麗はもはや防衛するに十分な兵力は整えられなかつた。

隋軍も宇文述父子らの将帥は作戦敢行のため脱走者を取り締まる
ことを第一義としたほどの状況ではあつたが、それでも第一次征遼
之役と同様に首都平壤城にまで攻め込んだのである。そして海上か
らは来護児の指揮する三百隻の船団が？水から平壤城に迫つたので
ある。

ここへ来て煬帝は興奮冷めやらぬ様子であり、逆に平壤城に籠る
高句麗王は顔面蒼白であつた。しかしそんな高句麗を救つたのはや
はり乙支文徳であつた。彼は先年の侵攻の際、密議により情報攪乱
で隋の前線を混乱させた上そのまま亡命した斛斯政を本土産に隋軍
の前に現れ降伏を申し入れた。そして煬帝の前に跪き、高句麗王が
したためた国書を読み上げたのだつた。それは完全降伏と年内の長
安参内を誓約する文書であり、これで高句麗は隋に敗北したことに
なる。

煬帝は大いに喜び乙支文徳を労い、高句麗王を長安で盛大に出迎
えることを約束して帰した。そして列将に撤兵を宣言すると、美酒
と美女の待つ楼車へと戻つていった。

宇文述も来護児も、そして他の将帥も高句麗の国書など信じては
いながつた。王の名で約した入朝を覆せば新たな戦を引き起こすこ
とになる。だが、果たして次があるものか……隋国内の叛乱はいや
増すばかりであり、もはや煬帝が敵命しても遠征軍をまとめること
は不可能である。乙支文徳はそれを知つて降伏をしたのであつた。

それでも撤兵に異を唱える者は誰もいなかった。兵たちはもはや征遼に耐えられず一刻も早く帰りたいがっているし、それは将帥たちも同様であったのだ。

征遼之役で苦難を強いられた兵士たちは喜び勇んで国土を目指したのであるが、隋国内もまた平和と安寧からほど遠い有様である。「知世郎」を称し計略を用いて官軍を振り回した王薄、義侠心に富みその人徳で多くの官人を寝返らせた竇建徳、十八人の同士と共に太守を討ち窮民を救った郭子和などの群雄が各地で叛乱を起していた。年頭、宮廷に参内する天下百九十郡のうち約二十の太守が長安まで上れないという有様である。叛乱軍が交通の要所を抑えたため上洛できないのか、それを口実に集めた租税を郡丞が私物化したのかは定かでない。

宮廷では多くの廷臣や将帥が去った。老いてこの時期に世を去った周法尚や樊子蓋は幸福であつたろう。ほとんどの廷臣将帥が予期した通り、高句麗王はあれこれと理由を言い立てて長安入城を先延ばしにしていた。ようやく高句麗の違約に気づいた煬帝は激怒し、四度目の征遼を文武の官に命じた。宇文述も来護兒もただ無言で平伏しただけである。もはや国庫には征遼軍を食わせるだけのゆとりは無く、民に徴兵を命じればそのまま叛徒の下へと走るだけである。高句麗に足元を見られていたのだが、それを見抜けなかつたのは煬帝だけであつた。

国庫を空にした原因は無益の出征だけではない。煬帝は政務を疎かにして国中を行幸していた。牛や人夫に牽かせた巨大な楼車に乗り、美女たちと戯れ酒に溺れ、そして詩歌を読んだ。長安と洛陽を往来し、時に江都まで赴いて海を眺める離宮を造営させた。あるいは思いつきで北は雁門の地に向かい、突厥の侵攻を招いたこともあつた。煬帝を護り雁門城に籠る隋軍三万を十万の突厥軍が包囲する。その危機を救つたのは、当時河東撫慰大使の任にあつた唐国公李淵

であつた。

煬帝危機の報に李淵はしばし考え込んだが、やがて息子の李世民^{りせいみん}を雁門に派遣した。叛徒討伐の最中であつたこともあり、寡兵を率いた李世民は詭計を以つて突厥軍を翻弄したのである。雁門城内の軍が混乱に乗じて反撃に転じ、突厥が速やかに兵を引いたため煬帝は無事救出された。だが煬帝は李世民の手腕を褒めるどころか、駆けつけるのが遅いと逆に叱責したのである。

家臣が顔色を失う中、李世民は淡々と煬帝に謝罪する。帰参して父に報告する時も彼は怒りを表すことはなく、聞いていた李淵もまた特に表情を変えなかつた。あるいはこの時こそが、歴史のひとつの転機であつたのかもしれない。

ほんの数ヶ月前まで典雅と奢侈の象徴であつた宮廷内も、荒んだ空気によんどんでいた。李密の例に見られるように、煬帝の思いつきで更迭された官吏は枚挙に暇が無い。そしてこの頃となると地位を求め同僚や高官を讒訴する佞臣が増え、その声を聞いた煬帝が簡単に処刑を命じるに至るのである。

煬帝の側近であつた魚具羅^{いぐろ}が謀反の罪で斬首された。彼もまた聖人君子ではなく、不正に蓄財し地位の低い者に罪を着せるようなことをしてきた。しかしそれも煬帝に付き従つていてこそであり、彼は謀反など考えてもいなかった。十分な詮議もないまま告訴から数日で魚具羅は処刑され、その様子を煬帝は酒を飲みつつ眺めていたのである。

歴戦の武将であつた楊義臣^{やうぎしん}は宮廷から突然姿を消した。処刑されたと正史には記されておらず、あるいは肅清の危機を感じて出奔したのかもしれない。

煬帝が無益な行幸と離宮の建造を繰り返す度に、心ある官吏たちは民の窮状と前線の将兵の辛苦を訴えた。そして煬帝はそれに対し、皇帝を不快にさせた罪を彼らの命で償わせたのであつた。もはや宮

廷には隋の行く末に対する皇帝の責務を言上する者はいなくなつた。皇帝とその取り巻きを遊ばせるために民は租税を搾り取られていく。そして困窮極まつた民は次々と叛乱軍へと身を投じていき、増えていく一方の叛乱軍に対抗する官軍の糧食は民にさらなる負担を強いていくのである。

重臣として、また左衛將軍として隋建国より仕えていた宇文述が病没した。武人としての軍功は薛世雄や来護児と並び称されるが、宮廷人としては遥かに煬帝の信頼を得ていたであろう。煬帝が南に行きたいと言えれば行幸の支度を整え、そこに留まると言えれば離宮の建造を手配してきたのである。彼自身は煬帝と異なり宮廷の外の様子を知らないではない。だが今まで築いてきた地位や財産を失うことを恐れた宇文述は、敢えて忌避を買うようなことを皇帝の耳に入れず煬帝の望むままに軍と国費を動かしてきたのだった。

そんな宇文述が床に伏した時、煬帝は直々に彼を見舞つたのである。腹心の死に際に心を動かされた煬帝は、涙を流しその手を握り締めた。統治者としては中国史を代表する暴君と呼ばれるが、一方で寂寥感を湛える数々の抒情詩を残した隋代一の詩人でもある。あるいはその豊かな感性に宇文述は惹かれていたのかもしれない。

「陛下、どうか臣の最後の願いをお聞き届けくださいませ。長安に腰を据え、国民の苦境に御心をお配りくださいませ。臣の愚息たちが、陛下の手となり足となりて粉骨砕身働きます。どうか、どうか陛下は国と国民のことをお考えくださいませ」

そう訴えて宇文述は息を引き取った。だがその後隋の状況は全く変わることはなく、煬帝は行幸の末に建康への遷都を叫ぶほどである。宇文述の子、宇文化及と宇文智及は亡父の遺言の通りに働くことはなかった。彼らは軍務にあつては父の威光無くしてはさしたる実績を上げることはなかったし、宮廷にあつても父ほどに主君の役には立たず、不正に財貨を得る手腕は父以上であった。宇文述亡き後、煬帝が彼ら兄弟を重用しなかったことはさして意外なことではなかった。

しかし地位を失いつつある者は、かつての榮譽を忘れることはできなかつた。？陽での戦いで河南討捕の軍と？讓率たくしやういる叛乱軍の大規模な戦闘があり、田宮寅や大滝彦の勇戦空しく張須陀の戦死で官軍が敗退したのはそんな時期のことである。

河南の情勢は大きく変わり、討捕軍の人事が刷新されたのは手柄を求めた武官が酒宴で煬帝に献上品と共に嘆願した結果である。代わりに皇帝警護の命を受けて田宮寅と大滝彦、そして花木蘭はむつつりとしながら江都に赴任した。

そしてある日、木蘭は内密で高官に呼び出された。指定された部屋で出された茶を飲みながら待っていると、刻限をずい分過ぎてようやく木蘭を呼び出した本人が現れた。

「待たせたな」

「いや、江都に来てから退屈することには慣れてしまった」

木蘭が下手な皮肉を返した相手は、かつて馬を並べて戦った間柄である沈光しんこうであつた。

「田宮寅と大滝彦は息災か」

「ああ、相変わらず無駄に声大きい」

沈光が僚友の近況を尋ねるのに、木蘭はいささか無愛想に答えた。河南討捕の軍が解体再編され、煬帝が居留する江都警備の任に当てられてから田も大もかなり機嫌が悪い。叛乱勢力の拡大で長安も洛陽も日に日に治安の悪化が進んでいた。それに反し風光明媚の地とは言え元々東都や西都に比べ人口の少ない江都では、むしろ皇帝警護の兵が住人より目立つほどの有様である。割り当てられた区画に兵を立たせておくだけの仕事など、つい先日まで激戦の河南にいた者にしてみれば張り合いが無いのであった。

「彼らは戦い足りぬか」

「張大使の仇を討てなくなつてしまつたからな」

田宮寅と大滝彦は楊玄感ようげんかんを討つた勲功により異例の速さで昇格したが、同格の武官たちからは嫉視と侮蔑の視線を送られていた。そんな彼らを河南討捕大使の張須陀ちようすだは手厚く遇したのである。張須陀自身も五十歳を過ぎてようやく斉郡太守の補佐となり、楊玄感の叛乱における混迷の中で頭角を現した苦勞人だった。それだけに配下の將兵への気配りは篤く、また田と大の性分をよくとらえ彼らに適した戦術を自由にやらせたのだつた。ある意味放し飼いとも言える起用であつたが、彼らは大使の期待によく応えて戦つた。

？陽の戦いで叛乱軍の罠にかかり張須陀は命を落とした。瓦崗の地で起兵した元官吏の？譲に、田宮寅と大滝彦は今一步の所まで迫つた。河南討捕軍の他の部隊もこぞつて？譲を追捕せんと殺到し、張須陀の周囲が手薄になつたところ、敵の伏兵が襲い掛かつたのであつた。伏兵の指揮者がかの李密しみつであつたとの証言もあるが、混乱の中で確かめる術はなかつた。

大恩ある上官の死をきつかけに河南の地を離れることになつてし

まったのは田宮寅にも大滝彦にも、もちろん木蘭にも痛手であった。苦い思いをかみしめて赴いた江都で彼らが見たのは、前線の労苦も民衆の困窮も知らず無為と退廃に満ちた宮廷の官人たちであった。

「河南討捕軍の活躍には、皇帝陛下もお喜びであったのだがな」

沈光がため息とともに哀惜の思いを口にした。その心情を察したものの、木蘭の口をついて出たのはやはり皮肉の言葉だった。

「張大使など所詮は郡丞止まりの無能な地方官でしかなかったと、今では口さがない官人たちが陰口の叩き放題ではないか。あの方の奮戦なくば河南の賊はあつという間に江都に攻め上つていたはずだ。そんなことすら官人たちにはわからないのか」

「戦線から遠のくと樂觀主義が現実に取って代わる、そして最高意思決定の段階では現実なるものはしばしば存在しない……戦に負けている時は特にそうだ」

そう言つて沈光は木蘭をなだめた。彼自身も同じ思いを抱いていたが、武勲により急速に官位を進め宇文述うぶんじゆつ亡き後ご来護児らいごの息子らいせい来整らいせいと共に前線の筆頭武官となつたため、自分の思うところを自由に述べることもできなくなつていた。

「今ではもう皇帝陛下に民や兵の労苦をお伝えする者がおらぬ。そんな気概を持った方々はお亡くなりになられたか……」

「陛下を見限つて野に下られたのであるう」

言葉尻を取られ苦笑する沈光であったが、茶を一口すすると真顔になり木蘭を見返した。

「こうなつては陛下に国の苦境をお話しいただける方は一人しかいない。その方から民衆と叛徒の状況を陛下にお伝えし、思い直していただかなければ大隋帝国は本当に倒れることになる」

「隋が倒れるか」

木蘭は大きく息をつく、にらむような顔つきで言葉を続けた。

「叛徒の略奪で壊滅した村をわたしはいくつも見てきたぞ」

沈光は、木蘭の危機感が自分とはいささか異なる方を向いていることに気がついた。

「それはよく知っている」

「それだけではない。生前の魚俱羅殿ウヰクハシロは河南に援軍に來られた際、配下の兵が民衆から略奪をするのを黙認しておられた。軍の中でそんなことが横行していることを陛下も官人どもも知りはいしまい」

淡々と語る木蘭だったが、沈光がふと笑みを浮かべるのを見て顔をしかめる。

「何がおかしい」

「いや、やはりそなたが適任だと思ったのだ」

「どういうことだ」

沈光の言葉の意味を図りかねて木蘭は問い返した。

「そなたが河南で見えてきたことをそのまま蕭皇后陛下ウヰウシウにお話してくれ。皇后陛下は慎ましくも慈悲深いお方だ。国民クニタミのため、きつと皇帝陛下に意見してくださろう」

「何故わたしなのだ。一介の武官が後宮におわす皇后陛下に謁見することなど、簡単に認められるはずがないではないか」

「そなたならできる、小柄なそなたが化粧をすれば女子オナメに化けて後宮に忍び込むことができよう」

一瞬木蘭は、沈光が自分の秘密を知っているのではないかと疑った。無論そのようなことはあり得ないと思ひ直しつつ、以前田宮寅大滝彦と四人で酒を酌み交わした時に、沈光が洛陽で一時期女装が流行ったとの話を聞かせてくれたことを思い出した。

「わ、わたしにはそんな趣味はない」

「では一度経験してみるとよい」

真顔で切り返されて木蘭は返答に窮した。女性の経験は十七年くらいある、と答えそうになったのは生来の真面目さ故であろう。

「どうだ、引き受けてくれぬか。この国の未来がかかっているのだ」それから二人はしばし黙ったままであった。沈光は新たな茶を器に注ぎつつも、返答を急かしたりはしなかった。差し出された茶に口をつけ、木蘭は沈光を見つめ返しながら答えた。

「わかった、皇后陛下にお会いしてこよう」

「行つてくれるか、では隣室に衣装や化粧品を用意してある。協力してくれる女官が三人いるから、身なりは彼女たちに任せればいい」
手回しのいいことだと思いつつ、木蘭はひとつだけ注文をつけた。
「いや、手伝つてくれるのは一人だけでいい」

それを沈光は気恥ずかしさ故と思ひ要求を聞き入れた。だが木蘭には別に思うところがあつたのだ。指示された部屋の前に立ちひとつ息を吸い、ゆっくりと扉を開けた。数本のろうそくがほのかな灯りをともし部屋に女官が畏まつて座つていた。伝わつた、そう思つた木蘭にようやく笑顔が戻つたのである。

「??? 丹蒂、来てくれたか」

安堵の声を漏らす木蘭に対し、顔を上げた??? 丹蒂は今までに見たことのない厳しい表情をしていたのである。

「来てくれてよかつた、わたしの体を女に戻してほしいんだ」

そう言つて笑いかける木蘭の顔は、??? 丹蒂の目には以前より引き締まつて見えた。鐘離郡の運河のほとりで出会つてからすでに五年以上の歳月が経過している。歴戦の勇者と言つにはいささか線の細い印象を与えるが、馬上で剣を構えて疾駆する姿は多くの賊兵を威圧したものである。田宮寅や大滝彦の豪快さの影に隠れ部隊内ではあまり目立たずにいたが、今の木蘭にはひとつの確信がその瞳に宿つているように??? 丹蒂には見えた。

「初めてお会いした時に申し上げたはずですが、あなたの戦いが終わつたら元の体に戻してさしあげると」

「だがこうも言つた、変容体を長く続けるとわたしの存在に支障が出る」と

「??? 丹蒂はしばし木蘭を見つめていた。何故か胸の鼓動が激しくなる。それに比べ木蘭は微笑みを崩すことなく自分を見返している。女神である自分にはこの動乱の行く末について、ある程度の予測がついている。それにも関わらず多くの人間の死を目の当たりにして

平静ではいられないのに、何故人間である木蘭の瞳に迷いの色が感じられないのであろうか。

「木蘭さまは何をお考えなのですか」

「沈光がわたしに何を依頼したのか、知らないわけじゃないのだから」

「存じ上げております、ですがあなたの願いを叶えることができないのは一度だけです」

「時々は元に戻さなければならぬのなら、今ちよつと戻してほしいと言っているんだよ」

「そこで??^{ベルダンデー}丹蒂がつい声を荒げてしまったのは木蘭の身を案じてのことである。」

「女性の身で事を為しても後宮に忍び込むことには変わりありません。よしんば目通りかなくなつたとしても、皇后さま本人にその罪を問われる危険もありますよ」

切々と訴える??^{ベルダンデー}丹蒂を、木蘭はただじつと見つめていた。

「わたしが木蘭さまの願いをかなえてさしあげたのは、いずれご両親と平穩にお暮らしたくためであつて国を動かすためではありません。それなのに何故自ら危険を冒そうとなさるのですか」

「まるでこの国の滅亡が決まつているかのような言い方をするんだな」

淡々と切り返されて??^{ベルダンデー}丹蒂は息を呑んだ。例え契約を交わした人間であつても未来に起こる事を告げたり、それを暗示したりすることは一介の女神に許されていない??^{ベルダンデー}丹蒂と彼女の姉妹は父親から時の流れに関わる能力を強く受け継いでおり、それ故に「ノルン」の二つ名を有するのである。

「高句麗で戦っていた頃は毎日が無我夢中だつた。見ず知らずの地で満足な補給も無いままとにかく目の前の敵を討たなければ生きて帰れないのだからな。それが河南ではどうだ、相手は叛徒とは言えわたしと同じこの国の民だ。官軍を食わせるために貢納を強いられ、彼ら自身が飢え死にしないためには官庫を襲うしかなくなつた

のだ。そうして増えていく賊軍を討伐するために更に官軍を増強し、民は更に絞り上げられていく」

静かな声で木蘭はつぶやいた。煬帝が統治者としての責務を放り出して後宮の美女たちと共に享楽に耽り、もはやただの取り巻きと化した文武百官を引き連れて無用の行幸を繰り返した結果、政治は乱れ国費は底を尽き人心は離れている。??^{ベルタンデー}丹蒂が神属の一般教養の中で学んだ人間国家の末路がそのまま繰り広げられているのだが、わかっていても飢えと戦乱で人々が死んでいく姿を見届けるのは辛いものだった。

「ある村を賊が襲撃した、たまたま居合わせたわたしは剣を振るい戦ったよ。敵はどの叛乱勢力にも与していないただの野盗だったから恐れるほどではなかった。しかし彼らは食料を奪おうと必死だった、仲間がわたしに斬られても構うことなく村人に詰め寄り食料を探していた」

木蘭に寄り添うことを求められてはいなかったため傍についてはいなかったのだが、その時の状況は遠くから??^{ベルタンデー}丹蒂も眺めていたのだ。木蘭はそれと知らずに語っているため、??^{ベルタンデー}丹蒂は黙って耳を傾けた。

「十人ほどの賊を斬り捨て、最後の一人をわたしは追った。村にわずかに残った穀物を奪い彼は必死で逃げた、そしてその行く先で一人の老人が立っていた。賊は剣を振り回し村人を威嚇して道をあけさせていたが、その老人は飢えと恐怖でもう動けなかったんだ」^{ベルタンデー}
その様子が??^{ベルタンデー}丹蒂の脳裏に浮かんだ。木蘭の口から伝えられるその様子を涙流さずに聞くことはできなかった。

「動けない老人の前に娘と思われる女が飛び出してきた、そして賊の前に立ちはだかったんだ。賊の振るった剣に娘も、その老人も斬られてしまった。わたしが追いつがって賊を斬り捨てた時はもう手遅れだったよ。その老人と、娘の亡骸をわたしは見た……」

そこまで冷静に語っていた木蘭の声が急にかすれ始める。

「その亡骸は、父だったんだ。賊に斬られて死んでいたのはわたし

と父だったんだ。わたしは父を守ることができず、そこで死んだんだ」

「落ち着いて、木蘭さま。そこはあなたの故郷である鐘離郡から遙か西の村のはず」

ベルダンデー「??丹蒂は立ち上がったって木蘭の肩を両手でつかんだ。木蘭の瞳からもまた大粒の涙が溢れ出している。」

「君にお願いを聞いてもらわなかったらきつとわたしも、そして父も母もああして死んでいたに違いないんだ。わたしが今こうして生きてるのは、??丹蒂がわたしの願いを聞いてくれたからなんだ」

「違う、木蘭さまが自分の力で、お父さまとお母さまのために戦い抜いてこられたからこそ今ここにいます。生き残ってこられたのはあなたが強いからです、わたしの力ではありません」

その言葉に今度は木蘭がはつとして??丹蒂を見つめ返す。

「わたしは、ずっとあなたを見守ってきました。あなたの行く先々で多くの人たちが剣に倒れ、飢餓に喘ぎながら亡くなっていくのを見てきました。でもわたしは、女神であつてもその人々を救うことを許されていません。その方たちを救うことは人間界の歴史に干渉することになってしまいます、わたしにはあなたのお願いを聞き届けること、そしてあなたの行く末を見守ることしか天上界に認められていないのです」

ベルダンデー「肩を震わせながら語る??丹蒂の言葉を、木蘭は涙を流しつつも黙って聞いていた。」

「木蘭さまがいつそのこと王になりたいと、皇帝になつてこの国を奪いたいと願つて下さつたならばどんなに良かったらうと何度も思いました。わたしは女神の力を全て捧げ、あなたを一年で中原の覇者とすることができたでしょう。そうなつていれば戦で亡くなる人々の数は遥かに少なくて済んだはずなのです」

ベルダンデー「木蘭は??丹蒂を優しく抱き寄せると、小さな嗚咽が治まるまで黙つて抱き締めていた。やがて??丹蒂が顔を上げる。頬の小さな紋章を涙のあとがにじんでいた。」

「わたしの願いは父と母の無事であり、そして生きて故郷に帰ると」

「わかっています、だからこそあなたは天上界の救済を得られたのです」

「多くの人々を救うなんてことはわたしにはできないよ。でも武官として目にしたこの国の有様を、女官となつて後宮の奥におわす方々に言上することができるともわたしだけだと思ふ。わたしが？？」
ベルダ
丹蒂に助けられて生きているのは、つまりそのためなんじゃないかと思つているんだ」

ベルダンデー
「？？丹蒂は木蘭の胸に頬を寄せながらその決意を聞いていた。自分ばかりとこの方から何かを学ぶために地上へ遣わされたのだ。神属に比べ遥かに弱く、時に傷つけ合い、他者からより多くを奪い取つて勝ち残つた者が正義を声高に叫ぶ愚かなる存在。人間がそんな一面を持つことを？」
ベルダンデー
「丹蒂は教わつてきたし、それを実証する出来事をこの度降臨してから何度も目にしてきた。胸の張り裂けそうな思いを何度も味わつてきたが、木蘭もまた同じ思いを抱いており、そしてそのために行動を起こそうとしていることを今ようやく実感したのでつた。」

ベルダンデー
「？？丹蒂は木蘭の武装を解き、衣服を脱がせていった。頭になつたその身は細い女性の体である。用意されていた湯で木蘭の身を拭き清め脂粉おしろいをつけていく。初めて見る衣装に袖の通し方すらわからぬ木蘭に、？」
ベルダンデー
「丹蒂が手際よく裙衣をまとわせ帯を巻きつける。そして木蘭を椅子に座らせると髪を梳いて整え、丁寧に結び上げて碧玉のかんざしを飾つた。そして最後は淡い臙脂を目元と唇に引いて、木蘭に生まれて初めての化粧を施したのでつた。」

「さ、どうぞ」

ベルダンデー
「？？丹蒂が差し出した鏡を見て木蘭は驚いた。戦場にあつては時として自分が女であることを忘れていた木蘭には、今鏡に映っている顔はまるで知らない顔であつた。」

「父さんと、母さんにも見せてあげたい」

「ええ、お嫁に行く時は今よりもっときれいになれますよ」
そうつぶやく木蘭に、ヘルダンデー丹蒂は精一杯の笑顔を向けたのだった。

絹の裙衣をまとった木蘭は迷路の如き後宮の中をさまよっていた。初めのうちは沈光しんこうに協力する女官が案内をしてくれたのだが、彼女たちにも務めがありいつまでも持ち場を離れていることはできない。監視役の宦官が巡回するのに度々出くわすため、木蘭は暗がりを選んで独り進み時に整列して進む女官たちの後ろをついて歩いた。

煬帝の命令により地方から無理やり連れて来られた娘たちで、この数年後宮の住人は数を増す一方だった。一夜だけ煬帝の相手をしてそれきり忘れられた者、あるいは一度として煬帝の顔を拜んでいない者も少なくなき、彼女らは典例に従い無為の日々を送っている。親や恋人と引き離された娘たちの中には後宮からの脱出を試みる者もいたが、外部に出る前に宦官に見つかり連れ戻されるか警護の兵に見つかりそのまま行方知れずになるかのどちらかであった。

木蘭は物陰に潜んで宦官や女官、あるいは妃妾の会話に聞き耳を立てた。息を殺して彼女らが通り過ぎるのを待ち、大きな柱から柱へと俊敏に駆け抜ける。戦場では鍛え抜いた男性の体であったが、今の木蘭は女性であり筋力が数段落ちていることを走るたびに実感していた。だが感覚は決して鈍ってはいない。不意に現れた宦官に見つかりそうになり、手刀の一撃で倒すことも考えたが慌てて身を隠した。事を荒立てても逃げ場は無いのだ。最初に案内してくれた女官と脱出の手筈を打ち合わせているが、それとて確実ではない。

やがて女官たちの立ち話から聞き取った、皇后がお気に入り場所だという中庭に面した回廊へたどり着いた。身を隠す場所を探すとそこにうづくまる。広い後宮をいつまでも歩き回っているのは得策ではない、皇后が独りで姿を現すとは限らないが出会える確立の高い場所でありあえず待つ方がよいと考えた。戦場にあつて待ち伏せによる敵後方の攪乱や、砦を攻める持久戦は木蘭の最も能くするところだった。

じつとしていると??^{ベルダンデー}丹帝の心配する顔が木蘭の脳裏に浮かんだ。早く無事に帰って安心させてやりたい、その気持ちは十分にあつたのだがそれとは違う感情が木蘭の中に芽吹いていくのも事実であつた。民のため兵のためにも国の厳しい現状を皇后と、そして何より皇帝に伝えたい。沈光の抱く思いは木蘭も同様であり、だからこそ彼の依頼を受け入れたのだ。だが同時に今の隋における災厄は全て皇帝が原因なのだから、それなりの責任を取るべきではないかとの思いが蛇のように鎌首をもたげていた。

木蘭が生死をかけて戦い、同僚や配下の兵士たちが戦場に斃れ^{たお}、追い詰められて叛徒となつた民が木蘭の剣に斬られたのだ。父を戦場に行かせないために戦い続けた、それは木蘭自身が生き残るためでもあつた。だが振り返れば累々と折り重なる死体を踏みつけて今この場に立っていることに違いはない。暗い雲が激しい風にあおられて流れ行き、血の滴る剣を片手に木蘭は荒涼とした砂漠を進んできたのだ。馬上で華麗に槍を振るう沈光がいて、怒声を吐きながら敵を追い立てる田宮寅^{てんくういん}と大滝彦^{だいさつげん}がいて、遠く行く末には酒を浴び詩歌を綴る煬帝がいる。後ろを振り返れば朽ちて倒れそうな行宮で美女と戯れる煬帝がいる。豪華な巨船の上で着飾つたこの男が十歳の自分をこんな所まで連れてきたのだ、文句のひとつも言わねば気が済まない。

文句だけか?今だつたらお前の手で皇帝を斬り捨ててこの国を手に入れることだってできるんだぞ?

冷たい笑みを浮かべた男の木蘭がそう囁くのを聞いて背筋に悪寒が走つた時、顔にかかる月光で目を覚ました。いつの間にか眠っていたようだ。顔を上げまぶたをこすつた時、何かうめき声のような音が聞こえてきた。

近くに人が居ないことを確認して木蘭は立ち上がると周囲を見渡した。耳を澄ますとその音は中庭の亭^{おみやげ}から聞こえてくる。あることが気になり木蘭は亭へと静かに歩み寄つていった。近づくにつれ疑念は確信になる。その音の正体は、男と情を交わす女の押し殺した

歡喜の声であつた。女としても男としても未だその経験の無い木蘭はその声に鼓動が早くなり、更には下腹部に生まれて初めての熱さを感じていた。やがて亭の板壁の外側に静かにしゃがみ込み、時が過ぎるのを待った。

やがて二人は行為を終えたようでも再び中庭が静寂に包まれる。衣服を整えた官女が亭を後にして後宮へと戻つていったが、相手の方はまだ残っているようである。木欄はゆっくりと亭の中に足を踏み入れた。そこにいたのはさして高くない身の丈に絹の袍をまとつた男性であつた。その衣服は後宮に忍び込んでから何度も見かけた宦官の物とは異なる。やや丸みを帯びたその背中では逞しさを欠き、戦場の男たちを見てきた木蘭には頼りなげに見える。そして、この後宮にいる男性と言えば一人しかいないはずであつた。

「皇帝陛下」

木蘭の呼びかけに振り向いたその男こそ隋の皇帝である楊広、すなわち煬帝である。

「そなたは何者か、見ぬ顔であるな」

遠めには幾度か見かけたことはあるが、皇帝の顔をこんなに近くで見るのは木蘭には初めてであつた。無益の師いくを起こし将兵と忠臣を害した帝、己が享樂に溺れ政まつりごとを放り出した帝。後世においてそう蔑まれるその男は間近で見ると覇氣は無いが悪意も感じられぬ、上質の装束さえなければ鐘離郡の田舎にいてもおかしくないように木蘭には思われた。

それがうら若き官女をこの亭に連れ込み、つい今しがた事に及んでいたのである。確かに彼女にしてみれば、自らの意思で後宮に入ったのではないであろうが、皇帝に気に入られれば妃妾に格上げとなる。懐妊でもしようものなら四夫人の一角となりえるとの思いもあつたであろう。後宮の外の情勢を耳に入れることができぬ故であるろうが、長年戦場に立つてきた木蘭には理解できないことだつた。

木蘭は皇帝の前にひざまずき、すいか誰何に対し非礼と知りつつも名乗りを上げずに訴えたのである。

「申し上げます。天下万民のことごとく、厳しい貢納と徴兵に困苦いたしております。長雨が続いて肥沃な江南の地ですら不作に喘ぎ、黄河の氾濫や天柱山の崩落といった天変地異までもが悪政を為す天子さまへの神仏の怒りと人々は言い募っております」

一声発すれば宦官の群れがすぐに木蘭を取り囲んだはずであるが、皇帝は木蘭の訴えを黙って聞いていた。

「飢饉はさらに悪くなり、足腰の立つ者は叛徒の下へと走る一方でございます。それだけではなく、兵士の中にも故郷へ帰ることを望み軍律を犯す者として出る有様。このままでは国の礎いしすえが危うくなるばかり、どうか一日も早く洛陽へご帰還あそばし民や兵の声をお聞きくださいませ」

「まるで自らの目で民の暮らしや戦場を見てきたかのように申すところを見ると、そなたはこの後宮の女官ではあるまい」

淡々と答える皇帝の声には驚きも怒りも込められてはいなかった。ため息をつきながら再び木蘭に背を向けて月を見上げる。そしてつぶつと何事かつぶやき始めたため、木蘭はただ待っていることしかできなかつた。

「千年の栄華も一夜の夢の如し」

ふいに皇帝がそうつぶやくのを聞いて、木蘭は拍子抜けしたように目を丸くした。

「いやおう、先日から対の下句が詠めぬのだ。儂の詩才も尽きたのであるうか」

「そのようなことはどうでもいいんです。今この国は滅亡の危機に瀕していると言っても過言ではありません、その責任をご理解しておられるのですか」

必死の訴えにまともな返事もせず、詩句などに頭を悩ます皇帝の姿に木蘭はつい激昂した。そして叫んでから自分がとんでもないことを言ったことに気がついたのである。

「はつきり物を言う女子おんなじゃな、そなたは。どうせまた栄国公あたりが儂に諫言するよう命じて寄越したのである」

皇帝が来護児らいごの名を挙げたが、木蘭の言葉に怒りを表す様子はない。その口調は江南の方言でかなり砕けたものである。煬帝は晩年、困難な政治課題に向き合うことなく酒食や荒淫に逃避していた。そして古の南朝文化に耽溺はまり、寂寥感を湛える抒情詩を数多く残したのである。結果として統治者としては失格であったが、同時に隋代を代表する詩人の一人と数えられる作品を残したのであった。「そなた知っておるか、唐国公がいよいよ挙兵し儂に叛旗を翻しおつたのだ。さて後に続く者がどれだけ出てくるか、見ものだと思わぬか」

その声に退廃の瘴気を感じて木蘭は絶句した。皇帝は自らの行く末を覚悟しているのだろうか。沈光は悪化の一途をたどる情勢に危機感を覚えて木蘭を後宮に送り込んだのであるが、彼のように心ある者は自らの仕える国と帝の行く末を案じて身を削り働いている。それなのに皇帝は何を思っているのか、木蘭はその心情が想像できなかつた。

「好き頭頸とつけい、誰だれが之これを斫きるべき」

亭から中庭に掘られた池に映る月と自らの影を見て、煬帝はそうつぶやいたと正史には記されているという。なかなか立派な首であるう、この首を狙って名門の李淵めや卑賤の野賊どもがこの江都を目指していることであろうが、さて誰が最初にたどり着くのであるうな。

皇帝はもはや自らの最期を知り、尚且つそれを避ける努力をすることもなくむしろ楽しんでいっているのではなからうか。統治者としての責任を自覚することなく、滅び行く国と自分を下の句にどう詠うのかだけを気にしているのではないか。木蘭の背中に冷たい汗が流れたが、それが怒りの炎に蒸発するまで時間を要すことはなかつた。

「ふざけないでください、そうやって呑気に月なんか眺めて下手な詩うたを詠んでる間にどれだけの人の命が失われていると思っ

ですか」

憤慨して皇帝に詰め寄る木蘭に、もはや礼節も何もあつたものではなかった。あるいは？？^{ベルダンデー}丹蒂の恐れていたものはこれだったのかもしれない。そして怒りに興奮し上気した木蘭の顔を見て、何故か皇帝はほくそ笑むのである。

「ではどうせよと言うのだ、儂にこれ以上何ができると」

「少なくとも將兵の前にたちその労苦をねぎらっていただければ、軍から離反する者を減らすことはできましよう。政権の足元を固めて後、徴兵を止め租税を改め臣民の暮らしを平穩に戻してほしいです。それ以上のことはわたしにはわかりません」

木蘭の口ぶりは町の役人に苦情を言うのと何ら変わらぬものであった。あるいはその程度のことすらできなくなっていたとも言えるのかもしれない。まくしたててから肩で息をする木蘭の腰に、突如皇帝が腕を回してきた。不意打ちに抵抗する間もなく木蘭は皇帝に抱きすくめられてしまったのである。

「な、何を……」

「気に入ったぞ、そなたの申す通りにしてみるも一興。儂はこの国の皇帝である、そなたの望みをかなえてやることなど雑作も無い」

木蘭には皇帝の言葉の意味がさっぱりわからなかった。皮膚のたるんだ顔を近づけられ酒精の混じる息を吹きかけられたことに嫌悪し身をよじる。だが皇帝は巧みに木蘭の腰をつかんで逃がしはしなかった。

「望む物は全て与えよう。この国をそなたの思うままに動かしたくばそれもよい。正一品の地位を与えてやる故、我が閨房に入るがよい」

急速に生氣のみなぎつた皇帝の発した言葉は、対句の詠めぬとぼやいていた先刻とはまるで別人のようだった。そして木蘭はその言葉の意味を理解できず瞬きを繰り返すのみだった。そして皇帝が自分の顔に口を寄せてきてから、自分が生涯初めての求婚をされたことに気がついたのである。

その時はまだ後宮に火の手が上がったことに二人とも気がついていなかった。

「退け、退けえいっ」

田宮寅が大声を張り上げて部下に命じる。皇宮の更に奥からの出火を見て駆けつけたのだが、同じ甲冑をまとう一団から突如矢を射掛けられた。すぐさま応戦したものの、敵の規模も正体も全く把握できなかった。

大滝彦が直属の精鋭を率いて前線から離脱するのを見ると、田宮寅はすぐさま撤退を決断したのである。敵味方が入り乱れた状況では、奮戦したところで同士討ちの愚に陥るか取り囲まれて逃げ場を失うだけだ。火の手が見えたということは敵が皇宮を襲っているはずだが、警護の任についていたはずの宇文兄弟から伝令も救援の要請も無いのはどうということなのか。

江都の中心地から離れて戦列を立て直したものの、一体どこを指して動くべきなのか田宮寅には判断がつかかねた。そこで彼は腕を組み、目を閉じてじっと待つことにした。

「せんぱ、じゃない田郎将、寝てるんすか」

不用意に声をかけた部下がぶん殴られて泣きながら持ち場に帰っていく。そして入れ替わりに大滝彦が帰参したのである。

「栄国公が討たれた、息子たち共々な」

「何だとおっ」

宿将来護児の死に田宮寅は驚愕の声を上げた。

「その後謀反を起こしたのは沈光だ田宮寅だと噂がばら撒かれて、栄国公麾下の部隊は大混乱だ。早々に江都の外に出たのは正解だったぜ」

「ばかな、我らを謀反人に仕立てあげようとした者があるというのか」

激昂する田宮寅に反して、大滝彦は奇矯な相好を崩すことなく淡

々と話を続ける。だがその顔ほどには冷静な心境ではなかった。

「来將軍の訃報から皇宮に火がつくまでかなり間があったはずだ。だが宇文兄弟の部隊は皇宮を完全に取り囲んで猫の兎一匹入らせてはおらん。そして来將軍の部下たちが主君の仇を討とうと沈光や俺たちを追い回していた。田ちゃん、こいつはどうにも出来過ぎてるぜ」

「確かにな、さてはあの宇文化及と智及の兄弟がくそつまらん策謀を巡らしおったか。大ちゃん、沈光はどうしたのだ」

「行方がわからん、部隊は来將軍の手下の報復で散り散りになったようだがな」

田宮寅が眉間に深い皺を寄せて齒ぎしりをしている。皇宮に異変がありながら警護の当事者が姿を見せずにいて、しかも自分たちはそこへ近づくことすらままならぬと言う状況は彼の矜持を深く傷つけていた。

「陛下の身は無事か」

田宮寅の疑問に大滝彦が自分の予測を開陳する。

「おそらくはな。宇文兄弟は皇宮の一角に陛下を幽閉し、玉音と称して自分たちに都合のよい詔を発するつもりだろう」

「彼奴ら、陛下を弑殺するつもりではないのか」

「陛下がおられなば我らが皇宮に攻め込んでくることくらいわかっていよう、だが」

「だが、何だ」

「図らずも陛下のお命を奪うことになってしまった場合、今と同じことを画策するかもしれない」

その言葉に田宮寅は沈光の身を案じたが、同時にもう一人この場にはいない者のことを思い出した。

「木蘭は、あやつどこへ行きおった」

「そう言えば沈光に呼ばれて……昼から皇宮に出向いたぞ」

「あのばか者めがあっ！」

二人そろって面妖な顔を蒼白にしていたが、江都の混迷はいかよ

うにもし難い状況であった。

絶叫が木蘭の耳に届き、程なくして亭を武装した兵の一団が取り囲んだ。兵たちがそれぞれ手にする剣や槍から血糊がしたっている。木蘭の体内で戦場の緊張感が久しぶりに駆け巡った。一瞬皇帝に視線を送ると、目の前の状況をどう思っているのか特に表情に変化は見られなかった。

亭を囲む兵士の輪の一端が開き、二人の人物が姿を現した。月明かりの下、木蘭はその顔を凝視する。話をしたことはないが、決して知らない顔ではなかった。

「あれは許国公の……」

その二人とは先年病没した重臣、宇文述の息子である宇文文化及と宇文智及であった。父の死後兄は右屯衛將軍に、弟は将作少監に任じられていた。亡き父の威光により得た地位であったが、彼らは公私両面にわたって煬帝に忠勤を尽くした父の半分も役には立たなかった。それでも一定の兵力を擁して皇宮警護の任にしていたのは、二人そろって官人たちへの働きかけに尽力したからである。彼らが亡父から受け継いだのは武官や官吏としての能力ではなく莫大な財貨であり、身につけたのはその財貨を保身のために有効に分配する判断力であった。

宇文兄弟が皇宮警護の任を望むのは戦場に立ちたくないからだ、官人たちはそう思い彼らを蔑みつつも賄賂を懐に納め便宜を図ってやった。それがこの事態へ向けての布石だったのかどうかは定かではない。はっきりしているのは、彼らが皇帝に対する忠節の殻を既に脱ぎ去っているということである。

「この数日、陛下はお気に入りの官女と深夜に中庭でお愉しみになると宦官の一人から聞いておりました」

宇文文化及が口を開く。つまり皇帝の周囲が手薄になる時間を見計らい、警護の兵を率いて後宮を襲撃したのである。ここに至るまで

に一体何人の女を斬ったことか、それを察して木蘭は血のたぎる思いを感じていたが、自分自身がお気に入りのお女であると思われていることには気づいていなかった。

「化及、智及。汝らが儂に剣を向けるのは如何なる故あつてのことぞ」

皇帝の問いかけに弟の智及は鶏を絞め殺したような唸りを上げる。ここまで至るのに殺戮の饗宴に酔いしれたのかもしれないが、腰抜けで有名な宇文兄弟は皇帝にいらまれて早くも萎縮しそうになっていたのである。

「て、天下万民が不当な労苦に困窮し、先帝の築き上げられた大隋帝国の礎を危うくされた陛下の罪は大きゆうござる。こ、ここに至つてはもはや帝位をお退きいただき、しかるべき御方にその座を譲られませ。後の事は我ら兄弟がお引き受けいたす」

事前に用意していたのであるう台詞を、宇文化及は口ごもりながら皇帝に向けてそう言った。今までも皇帝に諫言した者は少なくなかったが、武器を手に退位を迫つたのは宇文兄弟が初めてである。

「ほう、ではそなたらが民に代わつて儂の罪を問うと言うのか」

淡々と答える皇帝の度胸に木蘭は感心したが、よく見れば握り締めた拳が震えている。屈強な兵士たちの構える白刃が月光に煌くのを見て緊張しているようだ。その姿は木蘭の父の知人で、いつもだらしのないに女性の前では急に顔を引き締める羽老大うのおっちゃんそっくりに見えた。皇帝は木蘭にいいところを見せようとしているのかもしれない。

だがその虚勢は功を奏したようである。元々勇猛果敢などという言葉と縁の無い宇文兄弟は、皇帝の毅然と見える態度に落ち着きを無くしている。抵抗されるなどと思っていなかったようだ。木蘭は怯えた素振を装って皇帝にすりつくつと、小声で耳打ちした。

「このまま宇文兄弟の前まで進みましょう、わたしが血路を開きま

す」
その言葉に小さく頷いて皇帝は歩を進め、木蘭も寄り添つたまま

従った。亭の階段をゆつくりと降りる皇帝を、今度は宇文智及が糾弾する。

「へ、陛下はご自身の責務を省みず行幸と奢侈を繰り返し、更に無益の師で国庫と国民を疲弊なされた。そして忠臣の諫言をことごとく退けられ、結果宮廷は己が欲望のためにのみ動く佞臣どもの巢窟となった。す、全て陛下のせいでございます」

正論である。宇文兄弟は長年父に従って宮廷に出入りし、その有様を目の当たりにしてきたのだ。

「確かに、そなたの申す通りである。そしてそなたらの父も儂に従って巨万の財を成したはずであろう、そなたら自身も父の余慶に預かってきたのではなかったか」

宇文述は武将としての勲功も大きかったが、国や民よりも皇帝個人のご機嫌を取ることに関心を注ぐ奸臣でもあった。そして息子たちと言えば地位を利用して私腹を肥やし、彼らの罪を問う下級官吏や民衆を叛徒であるとして武力で害してきたのである。彼らこそ佞臣そのものであった。

「叛徒どもが儂を討つと言うのに、それなりの理由があるう。だが化及、智及よ。そなたらは父祖の代からの重臣ではないか、今さら掌を返せる道理があると本気で思っているのか」

それを言うなら何故もつと早く自分の責任を果たさなかつたよ。

木蘭は心の中でそう思ったが、このまま宇文兄弟に皇帝を害させるわけにはいかない。皇帝の責任を問うのはこの場であるべきでないし、何より彼らにそれを行う資格などあるはずがないと思うからだ。皇帝が宇文兄弟の前に立ち精一杯の虚勢で睨みつける、二人の動揺に周囲の兵たちも動くことができない。

今だ

木蘭はすぐそばの兵の手から剣を奪い取り立て続けに斬りつける。虚を突かれた宇文化及と智及の剣を叩き落すと、木蘭は皇帝の手を引き中庭から回廊に向かって走った。呼びかければ生き残った宦官たちとともに皇帝を守ることはできるはずだ。そう思った途端、左

の太腿に激痛が走り木蘭は転倒した。兵の一人が投げつけた槍が足をかすめ、出血している。立ち上がるうにも力が入らない。皇帝が声の限りに宦官を呼ぶが、騒乱は聞こえど応える者はなかった。ふたたび兵たちに取り囲まれ、木蘭の首筋に宇文化及の剣先が当てられた。

「大哥、この女の顔はどこかで見ただぞ」

弟の声に宇文化及は木蘭をにらみつけたが、やがて思い出して声を張り上げる。

「貴様、沈光しんこうの副使だった花木蘭ではないか。男色で陛下の寵を得るとは何と言ふ奴だ」

どこまでも誤解されている木蘭であったが、深い傷からの出血でそれどころではなかった。必死で立ち上がるうとするが体に力が入らず、化及の剣をはねのけることもできない。抵抗できない木蘭を見て、化及は口唇を吊り上げる。智及は兄が良からぬことを企んだと察した。

「こやつをどうする、大哥」

「丁度良いわ。沈光が陛下の暗殺を図り花木蘭を女装させて後宮に送り込んだ、我らはそれを知りこやつを成敗したが陛下は重傷を負われた。そういうことにすれば大義名分ができるし、沈光の奴を討つ名目も立つではないか」

宇文化及の口からどす黒い悪意が瘴気となって噴き出している。

このままでは自分の命が危ういどころか、叛逆者の汚名を沈光にまで着せることになってしまふ。そのことに心が冷え奥歯が音を立てるが、逆らう力はもはや木蘭に残っていないかった。

「とりあえずこやつの首を落としておく必要があるな」

「そうだな大哥、本当の女であれば別の使い道もあつたらうに」

叛逆を実行するのに再度氣勢を上げる必要があつた。残虐さに陰湿さを併せた表情を浮かべて、宇文化及は木蘭の首めがけて剣を振り下ろしたのである。

その場にいた誰もが木蘭の処刑に目を向けていて、本来の目的で

あつた皇帝の身柄を失念していたのである。ふいに立ち上がった皇帝が木蘭に覆いかぶさり、その背中で宇文化及の剣を受けるのを阻止することは誰もできなかった。

為す術も無く横たわっていた木蘭の視界を、皇帝の顔が埋め尽くした。

「この者たちは何か勘違いをしておるようだな」

それが隋の皇帝である楊広の最期の言葉である。その顔は笑顔だった。自分に向かってこれほどまでに優しく微笑みかける顔を、木蘭は生まれてから一度も見ることがなかった。その笑顔のまま、木蘭は木蘭の上に倒れてきた。木蘭の腹の上で彼は死んだ。

木蘭は全身でその重量を受け止めていた。背中の傷から溢れた血液が衣服を染め、やがて木蘭の体に伝わっていく。その感触をじわじわと皮膚で感じながら、木蘭は両腕を死体の背中にまわしぎゅつと抱き締めたのである。それが死者への手向けになるのかどうかわからないが、木蘭はそうすることしかできなかった。

「殺してどうするんだあつ」

宇文智及が上ずった声で叫ぶのが、木蘭にはそれがひどく遠くから聞こえてくるような気がした。

「か、構うことはないわ、陛下は重傷で表に出られぬと言っておけばよいのだ。とにかくこやつを殺さねばならん」

そう言つて宇文化及が振り上げた剣が月に重なるのが木蘭の瞳に写る。それなのに木蘭は動くことができなかった。自分に覆いかぶさる死体を押しつけられないのではない、たつた今自分の目の前でこの人間が死んだことに心が凍りついてしまったようであった。月光を反射しながらゆっくり落ちてくる刃を、木蘭はまぶたを閉じることなく見つめていた。

突如風が吹きすさぶ。強い風圧に化及は剣を取り落とし智及は腕で顔を覆う。兵士の中には倒れる者まで出るほどの強風だった。そしてまたふいに風がやむ。彼らが目を開けると、そこには見たことのない衣装を身につけた亜麻色の髪の水が立っていたのである。

「木蘭さま、お気を確かに」

そう言いながらその女は木蘭の上の死体に軽く手を触れた。すると死体が宙に浮き上がったのである。宇文兄弟も兵たちも驚愕して声が出ない。皇帝の死体は浮遊したまま寝返りし、同時に亭の木材がひとりでに外れて勝手に棺を形作っていった。大帝国の皇帝にはあまりに質素な物だが、死体は黙ってその棺に収まったのであった。

「さあ、帰りましょう」

「???丹蒂……」

木蘭はか細い声を上げながら、???丹蒂の手を借りてゆっくりと立ち上がった。左足の傷のために独りで立つことができず、木蘭は???丹蒂に身を預けるようにしている。その弱々しい姿に???丹蒂は胸を締めつけられる思いだった。

「と、取り押さえる」

宇文化及の命令で兵たちが???丹蒂に襲い掛かる。だが美しい顔立ちにすぐわぬ敵しい視線を打ち込まれて、立ち止まったまま動けなくなってしまった。???丹蒂が何事かを小さくつぶやくと、兵たちの剣や甲冑が粉になって風に飛ばされていく。それは首謀者たちも同様であり、化及の顔は青ざめ智及は半狂乱になって悶えていた。女神の怒りはそれだけで心の弱い人間の毒ともなるのである。

???丹蒂が細い腕で木蘭を抱え上げると同時に、背中に白い翼が現れた。そして小さなつむじ風とともに体が静かに浮き上がっていく。凜と引き締まった表情で月を見上げ、???丹蒂は空へと飛び立っていった。後宮を襲撃した暗殺者たちは地べたにへたり込んだまま、その姿を呆然と眺めていたのである。

月光の下を十数騎の馬が江都の大通りから城門を潜り抜け、それを追ってさらに数倍の馬群が疾走する。先頭を走る騎手は沈光であり、追っ手は栄国の旗印を掲げている。宇文兄弟の兵が皇宮を襲撃した時は辛くも脱出に成功したが、今度は来護児の家臣から主君の

仇と決めつけられ追い回されていた。

合流できた十数人の部下とともに混乱する江都からの脱出を図ったものの、栄国兵の誤解を解くことがかなわぬまま追われていた。沈光の武勇を以ってすれば返り討ちにすることもできなくはないが、それでは混乱に拍車をかけるだけである。

必死で逃げる沈光の耳に、後方から迫る馬蹄の音に混じって数十本の矢が風を切る音が聞こえてきた。追っ手の足並みが止まったと同時に前方から大軍が迫ってくる。それを見て栄国の騎兵は慌てて馬首を翻していった。やがて大軍が歩みを止め二人の巨漢が近づいてくるのを見て、沈光はようやく安堵の息を漏らした。

「手勢を全て横一列に並べるとは、貴公たちらしくない小細工だな」
「宇文兄弟の阿呆どもにしてやられたくせに大口を叩きおつて」

田宮寅たんのういんの皮肉に沈光は苦笑するしかなかった。江都を逃げ回りながら情報収集を図ったが、事態の全容を測るには至らなかった。

「貴公らも宇文兄弟が首謀者だと思っっているのか」
「まあ誰でもよからう、いずれ陛下の名を騙かたつて詔みことを出す奴が首謀者なのだ。それより沈光、貴公に問い質たづなりたいことがある」

大滝彦おほたけひこが珍しく深刻な顔でする詰問に、沈光も真顔で返答する。
「すまぬ、貴公らには内密で木蘭を後宮に差し向けた。混乱の中で後宮内を探すことも適あわなかった」

その言葉に田宮寅と大滝彦はむっつりと表情を強張らせる。木蘭を送り込んだ経緯を沈光が語るのを黙もって聞き、二人は決して責めることはしなかった。ただじつと空を見上げていたのである。

「どうしたのだ」
話が終わってもふたりが視線を空に向けたままであることに気がつき、沈光も空を見る。明るい月に重なって何が翼をはためかせているのが見えた。

「はて、この夜空に鳥が飛ばうとは」
ふいに田宮寅と大滝彦が愛馬にまたがり手綱を強くしごいた。各隊の隊長に待機を命じるとともに、沈光と彼の部下に水と食べ物物を

用意させた。

「ここですばらく休んでいるがいい、我らは用ができた」

田宮寅はそう言つて江都と反対の方角に馬を走らせ、大滝彦もそれに続く。あつけにとられた沈光の目には、月影を過ぎ暗い空を舞う翼は見えなくなつていた。

黙つて馬を走らせる田と大の視界で、その翼は徐々に高度を下げていく。振り返れば部隊は遠く見えなくなりそうになっていた。それでも二人は前に進む、沈光には聞こえず彼ら二人の耳に入った歌声に従つて馬を進めていったのである。やがて彼らの目の前で、その翼持つ者は地に降り立つた。たんだ翼がその背に吸い込まれて消えていき、亜麻色の長い髪に皇妃に勝るとも劣らぬ気品ある女性
が、彼らの僚友たる花木蘭を支えるようにして立っていた。

「木蘭、なんだその有様は」

大滝彦が声を張り上げる。上質な絹の裙衣を身にまとつていのは、沈光に請われて後宮に入るべく女装したためだと先ほど知つた。だがその衣装が血に染まり、さらに独りで立つこともままならぬとは如何なることか。

「傷は深かつたですがすでにふさぎました、ですが木蘭さまはひどくお疲れです」

「何者だ、貴様は。どう考えても人ならぬ者だが、だからと言つてものけ人妖の類とも思えぬ」

田宮寅の誰何する大声にも臆することなく、その女性は笑顔で答えたのだつた。

「わたしは女神の？？ベルタンディー丹蒂と申します。田宮寅さま、大滝彦さま、ご両所にお願ひがあつて参りました」

c p t ・ 0 9 故郷の空（前書き）

最終話です

曇り空からやがて小雨が降り始めた時、運河から通じる道を一人の娘が駆けていた。その姿に人々が奇異の視線を向けている。その服は田舎の鐘離郡では誰一人として身につけていない物であったが雨と泥、そして生地全体に染み込んだ赤黒い汚れのため、それが後宮の官女が着る絹服であるとなかなか気がつかれなかった。

郡庁前の目抜き通りにさしかかった所で雨はさらに激しくなり、娘は泥に足を取られ転倒した。靴が脱げ、出来たばかりの水溜りに顔をつつこんでしまう。角店の軒先で雨宿りをしていた物売りたちが心配げに見守るが、彼らも声をかけることにはばかられた様子である。

娘がゆっくりと体を起こすと結び上げていた髪がほどけ、雨に濡れて首筋や衣服にまとわりついていく。濡れた衣服の白い生地が透けて体幹を露わにし、顔は化粧が流れ落ち泥に汚れてしまった。それでも娘はもつれる足を必死で上げ、重たくなった衣服を引きずるように街外れの方へと再び走り出したのである。

「あの娘は長いこと姿が見えないと思っていたが、どうやら後宮に取られてたんだな」

「それにしてもよく無事で帰ってこられたもんだ、都の方は戦で大変だっただろうに」

「大変どころか、天子さまは謀反人に殺されちまったって話だぜ」

「ええっ、じゃあまだ戦が続くのかい」

「新しい天子さまが即位されたんだろ」

「いやいや、西と東の天子さまとでこれから本格的な戦なんだってよ」

「まあ、何にしても無事に帰ってこられてよかったってもんだ」

大通りから路地へと入っていくと、懐かしい家並みに荒廃の影は見られない。中原や河南、そして東都や西都の戦乱は遙か遠い鐘離

郡までは飛び火しなかったようである。板屋根が雨粒を弾く中、駆け続けた娘がようやく小さな門の前で立ち止まる。開かれた門扉から中を覗くと、そこには生まれ育った時から何ら変わらぬ庭があった。

彼女が門に飛び込むと、縁側には空と雨をじつと眺める老夫婦が座っていた。降りしきる雨の中、大きな息遣いに気がついた老夫婦が視線を移す。そこには今まで見たことのない衣装を、今まで見たこともないほど着崩した娘が立っていたのだった。

「父さん、母さん、木蘭が帰って参りました」

その言葉に父母は雨を厭うことなく裸足で庭に飛び出した。雫に涙も洗われてしまったが、親子三人が強く抱き合い生きて再会できたことを喜んだ。時に大業十四年（西暦六一八年）、隋の煬帝が臣下に弑殺されたその年に、花木蘭は七年ぶりに故郷の両親の元へと帰還したのである。

「田宮寅さま、大滝彦さま、ご両所にお願いがあつて参りました」
ベルダンデー

「??丹蒂にそう言われて二人の巨漢は顔を見合わせた。彼女の言い分を聞く前に問い質したいことが山ほどあつたが、翼はためかせ空から降りてきた美女に何をどう尋ねればいいのか田も大もとまどってしまった。腕を組んだまま硬直し、赤く染まった顔から蒸気を噴き出す二人に??丹蒂が改めて話しかける。

「お話ししてもよろしいですか」

「うむ、聞いてやろう」

そんな二人に??丹蒂が語った話の内容は、緊張を解きほぐすどころか吹き飛ばしてしまうものだった。

「皇帝は先ほど薨去なさいました」

その言葉に田宮寅は絶句し、大滝彦は何とか声を絞り出して聞き返した。

「まさか、本当に弑されたのか」

ベルダンデー
「丹蒂は笑顔こそ崩さなかったが、口調は硬くむしる冷たいものであった。」

「確かに宇文化及殿の刃にかかって落命なされましたが、それは木蘭さまを守つてのことです」

「どういふことだ」

ベルダンデー
田宮寅の問いかけに？？丹蒂は後宮での出来事を、更にさかのぼつて木蘭が従軍するに至つた経緯を語つたのである。聞きながら二人は木蘭に視線を送るが、その姿は女装した彼らの朋友ではなく、一人の女性にしか見えなかった。腕を組んだままで田宮寅が？？丹蒂ベルダンデーに問いかける。

「それをお願いとは一体何だ」

「皇帝が亡くなられた今、隋軍の大儀は失われました。よつてご両所の名に於いて木蘭さまを解任し、軍を離れる許可をいただきたいのです」

その言葉に今度は木蘭が驚いて顔を上げる。如何にしても生き残り必ず故郷に帰る、父母にそう誓つて出征したのが遠い昔のように感じられる。皇帝が亡くなったことで戦が終わつたことになるのか、天下はこれからさらに乱れていくのではないか、木蘭は不安に胸の鼓動が早くなるのを感じた。この恐怖心は剣を帯びていないからか、甲冑を身にまといていないからか、それとも女に戻つてしまつたからなのか。

木蘭は立ちすくんで田と大の顔を見た。見つめ返す二人の顔が以前とまるで違つて見えた。思えば彼らと共に戦い続けたこの数年間であつたが、田宮寅の武勇にも大滝彦の知略にも木蘭は及びもしなかつた。それでも彼らは木蘭を守り、常に役割を与えてくれた。父に教わつた武術だけで生き残れたわけではないことを、いつも思い知らされていたのだ。

ベルダンデー
「？？丹蒂、今わたしだけが逃げるわけにはいかないと思う……」

口から出た言葉の弱々しさに、木蘭自身が一番衝撃を受けていた。後宮に忍び込んだ時の勇氣はどこへ行つたのだらう、今の自分は父

に代わって戦に行くと言宣した十七歳の時より弱い女になつてしまつた。そう思うと涙が溢れてきた。何年も軍にいて一度として流すことのなかつた涙が、今夜は何度も何度も出してしまうのである。

「陛下が身罷られたことはいずれ明らかになるだろう。何者が長安か洛陽を押さえて新朝を興すか、江都に入り皇族のいずれかを傀儡に立てるかは何れもまだ争乱は治まるまい」

大滝彦が静かに言い、田宮寅も野太い声を控えめにして語つた。「そうなれば諸将や兵たちの中から離反する者も現れるだろうな。だが我らは平和が来るまで戦うさ」

そう言つて二人は一瞬だけ視線を向け合つたが、突如腰間の剣をベルダンデー抜き??丹蒂に斬りかかつた。その切先を??ベルダンデー丹蒂は両の掌で受け止めたのである。真綿を突く様な感触が田と大の手に伝わるが、逆にそこから剣を引くことも出来なかつた。

「さて、これこそ伝説に聞く崑崙の仙女と言つ奴か」

「神属を試すものではありませんよ」

大滝彦の言葉にそう言い返したが、特に立腹した様子は見られなかつた。??ベルダンデー丹蒂が手を下ろし戒めが解かれると、田宮寅は剣を鞘に戻しながら言つた。

「生憎と我らは戦場で生きてきたのだ。信ずるに値する者かどうか、剣を以つてせねば図ることができん」

「信じていただけましょうか」

「ああ。お主が何者であるかは知らんが、その力があれば木蘭を遠い鐘離郡に連れ帰ることができるだろう」

それを聞いて木蘭が田に詰め寄るが、彼は敢えて目線を合わせようとしなかつた。

「待つて、わたしはまだ……」

「もうお前に用は無い、郷里くに帰るが良いさ」

大滝彦もそう言い、二人は踵を返すと停めていた馬の所まで戻つていった。その広い背中に向かい、花木蘭は大きく叫ぶのだった。

「田宮寅さま、大滝彦さま。非力非才のこの身を今日までお助けい

ただきありがとうございました。最後までお役に立てぬまま、独り戦を離れることをお許しく下さい。妾には何もお礼ができませんが、せめてお二人の武運長久なることをお祈りさせていただきます」

「木蘭さま、参りましょう」

ベルダンデー

「?? 丹蒂の声に続いて強い風が吹き抜けた。田と大が馬上から振り返るとそこに居たはずの二人の女性の姿はすでに無かったのである。」

「田宮寅さま、だとよ」

「可憐だ、とても言えばいいのか」

平原を月が照らす。彼ら二人の影も色濃く、見上げる空は澄み渡っていた。戦いに明け暮れた歳月にあつて初めて見る美しい空であり、美しい月であった。再び見えることはないであろうが、二人ともそれを嘆くことはなかった。

「行くぞ、大ちゃん」

「ああ、田ちゃん」

そう言つて二人は彼らを待つ部隊の元へと馬を走らせたのである。太原にて挙兵した唐国公李淵は、その秋には長安を陥落させ煬帝の孫に当たる楊侑を即位させた。しかし煬帝の死を知ると禅譲を迫り、自らが皇帝となつて唐を建国したのである。洛陽では王世充もまた即位を宣言し、河北の竇建徳は勢力を拡大し南方を窺っていた。長江以南では蕭銑が梁の復興を目指して戦い、暗躍を重ねた李密もまた再び世に現れるのである。

つぶんかきゅう

つぶんちきゅう

宇文化及と宇文智及は煬帝の甥にあたる楊浩を皇帝に擁立する。

ついでいひ

蕭皇后と新帝、そして江都に残された財貨を手中に収め、一時は十萬の兵力を集めたのである。大丞相となつた化及は自らの一族に都合の良い勅令を乱発し、その兄によつて左僕射に任じられた智及は軍を動かし敵対者を惨殺していった。やがて江都において麦孟才らが数千の兵を集めて宇文兄弟の本営を襲撃する。しかしそこに二人の姿は無く、麦孟才は司馬徳戡の策略により捕えられることとなつてしまった。

密告により襲撃を事前に知った宇文文化及と智及は、百人以上の兵に囲まれて郊外に逃れていた。麦孟才捕縛の報を受けて安堵すると江都へ戻ろうとしたが、ふいに彼らの乗る輿を担いだ兵たちが動揺の声を上げる。見ると甲冑もまとわぬ三人の男が、次々と味方を斬り捨てていくのである。

「沈総持だ、肉飛仙が来た」

人並み外れた体術で敵軍を翻弄し、生身の肉体を持ちながら空を飛ぶ超人つまり肉飛仙と賞賛された沈光しんこうが現れたのである。その目的が自分たちの首であることは宇文兄弟も疑いはしなかった。恐れおのき斬れの殺せのと喚いて命じるが、沈光の華麗な剣技の前に警護の兵はまるで麦草のように刈られていく。そして荒れ狂う嵐のように戦う二人の巨漢を前に、逃げる暇すらなく倒されていった。

やがて宇文兄弟の周りには死体しか無くなっていた。迫り来る敵の恐怖に涙と鼻水を垂らしながら、二人は地面を這って逃げ出した。それを追う沈光も二人の巨漢も全く無傷というわけではなく、大量の血を体中から溢れさせつつゆっくりと近づいていった。そして宇文兄弟に剣が届く所まで到達した時、司馬徳戡の騎兵隊が駆けつけた。尋常ならざる襲撃者に狙いを定めると、弩おゆみから一斉に太い矢が放たれた。それぞれの体に三十本以上の矢を撃ち込まれて、沈光と彼の同士は遂に絶命したのである。

高句麗遠征で華々しい戦果を上げ隋代屈指の勇将として知られた沈光は、群雄割拠する動乱の行く末をその目で見届けることなくこうして時代の波間に散った。隋書、あるいは北史と言った史書にその名が書き記されているが、彼の最期に同行した二人の人物についての記述は歴史に遺されていない。

卓上の空間に浮かんだ小さな画面に、雨の中で抱き合う親子三人の姿が映し出されていた。その画面をしなやかな指でなぞると、視点は上方へと動いていく。鐘離郡の空は緩やかに雲が流れていき、

夕刻が近づくとつれ赤い陽が西の空を染めていた。

柔らかな唇が小さく動き聖紋ルンを唱えると画面は黒く変わる。そして数秒後には画面そのものが消失して元の空間に戻っていった。操作していた女性は目を閉じ、ため息を一つついた。

自らの任務は完了した、歴史の激流の中でほんの小さな幸福を守ることに成功したと言っていていいだろう。だがその間にどれだけ命が失われたのか。悠久の年月をかけて学び修得した大いなる力をもつてしても、自分にできることはほんの僅かしかないのだ。そのことを彼女は知らないではなかったが、改めて実感させられると心にかかる霧を払うのは決して容易ではなかった。

「報告書、急いでね」

上司の言葉にどうにか笑顔で応えようと、彼女は端末を起動させ再び目の前の空間に画面を構築した。文書作成ソフトを立ち上げ、迷いを振り切るように無言でパネルを叩き続ける。契約者が置かれていた状況をアセスメントするため、端末を公文書館のデータベースに接続させて別の画面に展開した。大陸の歴史を黄河文明発祥までさかのぼり、さらに同時代における世界情勢を確認するためアラビア半島や地中海周辺まで調査した。

人間界のどの時代であつても、どこの国においても人の営みは変わらない。笑う者と泣く者、戦う者と守る者、そして奪う者と奪われる者。大きなうねりに飲み込まれ、踏みにじられる人生のなんと多いことか。そしてこれから先、自分はどのような人間と出会うのだろう。幸福を実現する、その意味することの大きさと難しさを改めて思い知らされるのであった。

天上界でも日中降り続いた雨が次第に収まり、お助け女神事務所のオフィスに大きな窓から夕陽が差し込んでいた。終業の時刻が迫っている。彼女の上司は基本的に残業を認めず、早々に帰宅して家族と過ごす事を勧める主義であった。そして彼女自身も、今はあれこれ考えるより早く家に帰って姉と妹と三神さんじんで夕食を摂りたいと思っていた。

人間界で出会った女性のその後の人生が豊かで幸福なものになることを願いながら、ベルダンデーは急ぎ報告書を書きつづったのであった。

了

c p t ・ 0 9 故郷の空（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
ご意見、ご感想をいただければありがたいと思います。

大業1,407年3月12日深夜、より多くの方の救出を女神さま
に祈りつつ。

羽 衣石 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1655q/>

北天女神譚異聞～花木蘭とベルダンディー～

2011年3月15日23時55分発行